

公開シンポジウム

祭礼と芸能

〔日時〕 平成二十七年七月十一日（土）

午後一時三十分～五時

〔会場〕 國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホール

〔主催〕 明治聖徳記念学会

〔共催〕 國學院大學研究開発推進センター

祭礼と芸能

山路 興造

ただいまご紹介にあずかりました山路興造と申します。いま肩書のほうも言われたのですが、実は今年の三月まで日本民俗芸能学会の代表理事をやっていました。二十年近くやっていたので、それは譲りました。また、現在私が住んでおります京都で芸能史研究会という全国学会がありまして、その代表も二十数年やっていたのですが、それもやはり年だということでのあいだ辞めて、いまはそういう役職をみな外して自由な身で新しい研究を始めたいと思っています。

この基調講演を頼まれたときの題名には「京都・近畿地方の祭礼と芸能」と書いてありました。私は現在、京都を中心にいろいろな勉強をしているのですから、そういう近畿地方の祭礼と芸能を中心にしゃべれということなのかと

思ったのです。と申しますのは、ちょうどいま京都では祇園祭が始まろうとしております。七月十七日が先の祭り、二十四日が後の祭りになります。それからもう一つ、七月十四日には和歌山県の那智大社、那智の滝ですね、あそこでも扇祭り、昔は火祭りと言われていたのですが、正式名称であるもとの扇祭りに戻りまして、それがちょうどいま真つ最中で、昨日でしたか、大滝の上に大きな注連縄を張っているところ テレビに映っております。あの意味では関西地方はちょうどこの七月の今頃はあちこちで祭礼と芸能が行われている。そのことも含めて、たぶん近畿地方のことをしゃべれということだと思ったのですが、実は私は純粹の江戸っ子なんです。

生まれたのが、この國學院の隣の氷川神社のすぐ隣なん

です。もちろん戦前です。ですから、産土神というのは、その氷川神社ということになりますし、そこで戦争に遭いました。國學院は焼けなかったけれども、実践女学院は焼けましたし、私の家も焼けてしまった。氷川神社は焼けなかった。私の家が焼かれた時にどこに逃げたかというところ、尾尾中学、その頃広尾国民小学校だったのですが、そこに逃げたのです。この地が焼かれてしまったので、その後住んでおりましたのが日本橋の本町一丁目、いまでいう江戸橋のたもとのところ、に小学校五年まで過ごしました。それから以後は、基本的には渋谷の青山で育つのですが、大学を出て三十九歳ぐらいまでは東京におりまして、研究もしたい東京を中心に行っていました。

ところが、やはり東京じゃだめだ、芸能の歴史とかそういうことをやるためには関西のほうがいいということ、いまから三十七、八年前に京都に移り住んで、それから京都のこともやり始めたということ。基本的に私の京都でのしゃべり方もそうですが、江戸っ子としてしゃべっています。京都の連中は後ろのほうで、江戸っ子のことを「馬鹿」と思っているのですから。関東人を単純だと思っていますから。そう思わせておいたほうが、京都というところは暮らしやすいんです。変に関西ふうになつてしまつと、ものすごく暮らしにくい。関東者だと思わせてお

いたほうが暮らしやすい。それが私の一つの処世術でもあります。

ということもあって、今回は関西が中心のお話もしますが、それより前提として、私の簡単なレジュメのところ、にいくつか書いていますけれども、「祭礼とまつり」ということについて最初におしゃべりしておきたいと思います。最近、祭りという言葉が多すぎます。といって、じゃ、この祭りに神様が登場するかというと、必ずしもそうではない。そこで、私などは便宜上、神様を勧請してきちつとした祭祀をする、年中行事をするもの、祭事としての祭礼、それを祭礼と呼ぶようにしております。それに対して、いわゆる催し事、神様を呼ばないでいろいろな催し事をする。それも全部祭りと呼んでいますね。そっちのほうは「まつり」と書くというふうには、私の気持ちの中では区別をしています。今回は祭礼と芸能というのがテーマですから、もちろん神様を勧請する神事が中心の祭礼にはありませんが、あまりにも催し事としての「まつり」が多すぎるので、とりあえずそういう区別を私自身がしているということをお話しておきたいと思えます。

もう一つ、芸能についてお話をしたいのですが、私がこの近くで生まれて、昭和二十年五月の空襲で焼け出されてしまったものですから、埼玉県の高坂という村、いまはイ

ンターチェンジがあつて、大変なところになつてゐるみたいですが、昔は東上線の沿線の本場に小さな村でした。その高坂というところに一年間だけ疎開をしました。その前後の経験なのですが、戦争が終わつてすぐの秋に、私は高坂にいたのですが、日本橋の家が焼けなかつたので、日本橋には親に連れられてしょっちゅう行つていたんです。その秋の時に見たのものごく印象に残っていたのが、人形町の隣に芳町といういわゆる花街がありまして、人形町にしても芳町にしても焼けなかつたんですが、その芳町の芸者さんたちがそろいの衣装で日本橋の橋の上で踊りを踊つたんです。それはほくがまだ小学校に入るか入らないかぐらいの時だったのですが、たいへん印象に残っています。あれほど苦しかった戦争があけて、一般庶民にとつては戦争から解放された喜びを、芳町の芸者さんたちが日本橋の橋の上に勢ぞろいして、そろいの衣装をつけて踊つた。この芸能のありようというところに私は小さい頃にたいへん感動して、よく覚えていきます。

同時に、私が疎開しておりました高坂の村の人たちも、その年の秋祭りには「マンサク踊り」を盛大にやつたのです。復員してくる人もそんなにいなかったと思うのですが、それでも村人たちが中心になつて、高坂村の秋祭りの芸能であるマンサク踊りを盛んにやつた。私がよく覚えている

のでは、実際に演奏する人がいなかったものですから、当時の蓄音機で「かわいのおまえがあればこそ」とか、あいう歌謡曲を鳴らしながら即興的に、若者たちが女装をして踊るということをした。戦時下の鬱憤を芸能で爆発していた。戦後のあの時期にですよ。その時に考えたわけではないんですが、あとから考えると、そういう芸能がもつてゐる力は、祭り、祭礼とは関係ないのですが、そういう芸能自体がもつてゐる力というのはすごいものなんだなという感じました。

その後、私が大学を卒業してしばらくたつた頃に、沖繩出身の法政大学の先生で外間守善という先生がおられました。『おもろさうし』を訳された方です。この外間守善先生と新幹線で一緒になつて、ずっと話をしながら京都に行つたことがあるのですが、その時に聞いた話。自分は戦後すぐの沖繩で県庁に勤めていたというんです。その時、焼け野原になつた沖繩で自分たちは何をやつたかというところ、生き残つた沖繩の芸能人たちが、あそこには本職の芸能人たちがいましたから、そういう人たちを集めて芸能団を仕立てて、その焼け野原になつた村々を芸能をもつて回つた。県の職員としての自分たちはそれを仕立ててあちこちの村々を回つた。そしたら、本場に沖繩の庶民の人たちが、三線（さんしん）はなかつたけれども、それこそいろいろ

なもので楽器を工夫して熱狂的に踊り狂った。芸能団を迎えてくれた。あれはやつぱり自分の経験としてはものすごい芸能に対する思い、とくに芸能が非常に好きな沖繩の人たちが、ものすごい被害を受けて家もなにもすべてをなくしてしまつた中で、身体にもつている芸能というもので新しい時代の何かを発散させた。自分は芸能団を連れて沖繩本島をあちこちに回つたから、それを目の当たりに感じたという話を聞きました。その時にぼくは、日本橋の橋の上の芳町の芸者さんとか、高坂村の青年たちの芸能とか、そういうものを非常に身近に感じたわけです。

これは実は、ついこのあいだの東日本大震災で被災を受けた村々、地域住民たちがやはり、自分たちが身体で伝えてきた芸能というものをもって、それを演じることによつて共同体の意識とか、いろいろな気持ちの高揚とか、そういうものを表現している。これは実のことを言いますと、関西の震災にはなかつたことです。とくに神戸とか、都会の場合にはそういうことは聞かなかつた。しかし、東北地方の場合、地域共同体というのが残つて、なおかつその地域共同体による芸能というものを伝承しているところであればこそ、やつぱり芸能というものがもつている力というのがああいふ時に発揮されるんだなということをつくづく思つたわけです。

もう一つ付け加えますと、ぼくは日本橋に小学校五年までおりまして、その後青山に來たんです。小学校の五年くらいだと思ふんですが、國學院大學の近くにあります金玉八幡さんで大変大きな祭礼があつた。いま二四六号といわれている、もつと狭かつたですけども、青山通りの町々が中心となつてそれぞれ金玉八幡の大々的な神輿行列。神輿がよく残つていたなと思つたんですが、神輿行列とかいろいろな行列を戦後やつた。その後聞いたことはないんですが、その時だけはやつぱり爆発させたんですね。そういう意味での祭りとか芸能の力、人間が生きるということに對する、そういうものの力というのは相當なるものがあつたんだなということ、今回の東日本大震災のときに芸能が一つの大きな役目を果たしたというのは、そういうものと見比べながらいろいろなことを考えさせられた。このところまでをとりあえず序章にして、いよいよその三番目の神社祭祀と芸能というお話に入つていこうと思ひます。

神社、神社と言ひますが、きょうみたいな学会でこういうことをしゃべつていいのかわからないんですが、私は神社には二通りあると思ひます。一つは、神様が常にその場所に常住している神社。代表的なのが伊勢神宮ですね。それから出雲大社。そういう常住している神社は、まづ御柱がある。柱というのが実はいへん重要な神様の神

座。柱そのものではなくて、穴を掘って柱を土の上に立てるといふ、このところに神様がいらっしゃると思ひます。いずれにしても柱を中心にして、建物自体は柱を飾るものであつて、いちばん重要なものは心御柱とか御柱とか、柱のほうだと思ひます。その柱を立て神様を常住させている神社が、日本にはたくさんはないけれども、いくつもある。こういう神様を常住させている神社は、神様がそこに常におられるから、絶対に朝餉、夕餉という二回の神饌は差し上げなければいけない。日本人は昔は食事は二回ですからね。室町時代の末ぐらいから三回になるのであつて、それ以前は二回ですから、古い時代の食事は二回でいい。朝餉と夕餉は必ず献じなければいけない。また、神が住まわれている建物である神社は、二十年に一回、そうでない場合もあるけれども、建て替えなければいけない。と同時に、神様が生活している生活用具も常に新調しなければいけない。いわゆる御神宝といわれている神様の様々な生活用具ですね。一種のミニチュアでいいわけですが、いろいろななかたちで様々な実際の生活用具を奉納しなければいけない。これは神様が常住している神社だと思ひます。

それに対して、神社といへども神様が常住してない神社が基本的には大部分だと思ひます。こんなことをここで言つたら怒られるかなと思ひながら言つてあげてもいい。

それは何かといふと、お祭りをする前に神迎えをする。終了と神送りをする。といふことは、その神社そのものには普段は神様はいらつしやらない。古くから神様の名前をつけて、いろいろな神様の名前前で呼んでいきますけれども、地方の共同体の神様といふのは基本的には先祖神だと思ひます。自分たちの先祖を共同体でお祭りしていると思うのですが、その先祖神といふのは、もともと神社の中に入っているのではなくて、本来は、たとえばその場所から見えるいちばん美しい山、それが甘南備山。それが二上の形をしていればよりよいのですが、いちばんきれいだと思はれている山の頂に神様たちはいらつしやる。海の近くだったら、ニライカナイといわれるように海の向こうにいらつしやる場合もあるだろうし、地域によつて違ふだろうけれども、必ずしも神社に常住しているわけではない。沖縄の場合は典型だと思ひますけれども、普段その場所にはいない。

「ヤシロ(社)」といふのは、建物のことを言うのではなく、といふことは学者の論文によつて証明されておりますが、基本的に神聖なる一区画、神様をお迎えする区画、それが社なんだといわれています。必要なとき、要するにお祭りをするときその神様をその社、のちにはそこに本當の意味で建築物を建つ、お社が建つていくわけですが、そこに迎えをして、そこで迎えをした神様に対してい

ろいろな祭事を行う。終わったら、またお帰り願う。そういう神社では、普段は建物の中に神様はいらっしゃらなくていいわけで、失礼なことですが、普通の村の神社のお社の中をあげたら、鏡があつたり御幣があつたりするかもしれないけれども、基本的には神社の本殿は箱ですよ。普段は。そこに必要なときに神様をお迎えしていると思うのです。それが常住してない普通の神社。この二つに基本的には分けていいのではないかという気がします。

私、学生の頃に鳥根県的美保神社というところに行つたんです。あそこが神様が常住している神社かどうかはちよつとわからなかつたのですが、非常に感心したのは、朝神楽、夕神楽という神楽、これは巫女舞ですが、朝と夕方には必ず一人の巫女が神に対して舞っていた。これは毎日毎日舞っているんです。それを見て、朝餉、夕餉というかたちではなくて、神様に朝と夜にちゃんと巫女舞を舞うという伝統を残した神社もあるんだなと思つた。ただ、美保神社が神様が常住して、きちつと朝餉、夕餉を毎日差し上げている神社かどうかということはまだ調べてないのでよくわからない。たぶん違うと思いますけれども、そういうかたちで巫女神楽を朝と夕に奉納していたのに、まだ若い学生として非常に感動したことがあります。

もう一つ、私なりにまたこれも神社側から怒られること

を言いますと、神社と御旅所の関係です。普通は、神社があつて、その神社にいる神様を神輿に乗せて御旅所に渡御する。そして、御旅所でお祭りをして、また再び神社に帰ってくる。これがこんにち行われている普通の祭礼だと思ひます。でも、本当にそうなのかな、それでいいのかなという疑問を私をもっているんです。

たとえば先ほどちよつとお話をした和歌山県的那智大社のお祭り。これは現在七月の十四日に行われています。この扇祭りと呼ばれているお祭りですが、このお祭りを、もつと古い時代、明治三十五年以前のかたちに戻すと、どういうかたちでやられていたかというところ、旧暦の六月十四日にまず日本一といわれる大滝を御神体として神様を祀っている。いまでも飛龍神社という神社設備がありますけれども、実は那智大社というのは本来の御神体は滝そのものじゃないかとぼくなんか考えているんです。いまの扇祭りを見ますと、本社、権現とも言っていますが、本社があつて、本社から神輿が出て、滝の前に行つて、それで神事をやって、滝から一日のうちに帰ってきてしまう。また本社に戻ってきてしまうというやり方をやっている。

明治三十五年以降、こういうやり方をやっているんです。それ以前のやり方がどうであつたかというものを、いくつか史料があつて私も報告書を出しているんですが、その史

料を見てますと、そうではないんです。旧暦の六月十四日という日に、実は先に大滝の前で扇神輿という十二本の扇を使った神輿をまずお祭りして、その大滝の神様を本社の方にお遷しする。そして、お遷しして、そこで様々な芸能をして、十八日に逆にその扇神輿が滝のほうに帰っています。そういうかたちの祭礼をやっているんです。かたちはそういうかたちですけれども、お祭りをしている人たち、当時は神仏習合が明治五年まで続いていましたから、いわゆる修験者を中心とした寺院組織やなんかもあるんですが、それとは別に一応大滝を御神体として、本当は滝の前で御神体をお祭りをすればいいんですけども、そうではなくて、お社というのをもうちょっと上のほうの平坦な地につくって、そちらがわに扇神輿で御神体を遷して、本社前で芸能をやって、それからお帰しするというかたちなんです。

いろいろな神社を見ますと、いわゆる御旅所と呼ばれるというふうが、もともとの御神体の場所じゃないだろうかというふうに思われる神社がたくさんあります。熊野新宮なんかでもそうです。熊野川そのものが御神体。熊野川のちよūd真真中に島があるんですけれども、それが御神体。その御神体を熊野川のあまり洪水にならないこちら側にお社をつくって、そちらを本社として、御旅所のほうに渡御

するとかたちを普段は取るんですけども、本来の私たちは御旅所の側に御神体があるんじゃないか。逆に御神体を常時お祭りするためにこちらにお社をつくって、そちら側を皆さんがお参りしているんじゃないかという気もするわけです。

京都の祭りですと、賀茂祭というのがあります。平安時代から、単に「祭り」といえば賀茂祭のことをいいますけれども、これは上賀茂社と下鴨社と二つに分かれて一体となっている神社なんです。たとえば現在、葵祭という祭りが行われていますが、葵祭というのは祭りではありません。祭りはちゃんと神職さんがやっているんですが、見物人を集めているのは、天皇家の皇女を齋宮として巫女に入れる、そういう平安京にとってはたいへん重要な賀茂のお社に対して、様々な捧げ物を牛車の中に入れて、勅使が美々しい行列をつくって、初めに下鴨社に行き奉幣する。それから上賀茂社に奉幣に赴く。行くその行列。宮中から出る貴人の奉幣や捧げ物を入れた牛車の行列が大変に美しくなったから、葵の葉っぱがたくさん使われてましたから、平安時代から葵祭といわれている。

祭事のほうはどうかというと、実は上賀茂社のほうは、現在上賀茂社のあるお社のずっと後ろのほう。いまはゴルフ場があったりしてちよūtとややこしいんですが、そこに

神山と書いて「こうやま」というお山がある。そこで、人々に一切見せてはくれないのですが、真夜中に、みあれ神事という神事がおこなわれます。神主さんたちだけで、そこで神様がみあらわれる。現われる。その神様を神社のほうにお連れする。ですから、上賀茂社でお祭りをやっているときは神社に神様はいらっしゃる。でも、終わったら神山にお帰しますから、常にはあの神社そのものに神様がいるわけではない。下鴨社のほうはというと、高野川の上流の山のところに、いまでは御蔭神社と言っていますけれども、神様が現われる場所がある。そこから神主さんたちが神様をお連れして、下鴨社の社殿にお移しする。そこで東遊とかいろいろな芸能が演じられる。そして再び神さまをお帰しするというかたちをとるわけです。

芸能はいつ行われるか。神様がみあらわれる祭事を行っているそこでは、もちろん芸能はありません。あくまでも現われた神様を大切に神社のほうにお迎えして、神社のほうで芸能は演じられる。上賀茂社も下鴨社も同じです。神様は神社のほうにおりますから、天皇家から奉げられた御幣や様々な献饌品は牛車から出されてその二社にお供えされるし、芸能もそこで供えられる。

もう一つ例を挙げますと、奈良に春日大社があります。春日大社の本当の祭りは申祭といつて、また別にあるんで

すけれども、有名なのは旧暦ですと十一月、現在ですと十二月に行われる若宮社のおん祭。祭りといえば、関西では賀茂祭なのですが、それに「おん」をつけておん祭りという、この奈良の春日若宮の祭りのことになります。この春日若宮のお祭りも十二月の十六日から十七日にかけて行われるのですが、実は若宮社の拝舎と呼ばれる拝殿で、前に田楽が奉納されます。それは単に奉納に行くだけで、とくにいろいろなことはないんです。十六日の夜中に神主さんたちが全部集まって、この若宮の神様を真つ暗な中を御旅所にお遷しします。御旅所は九月からつくられている仮屋があるんですが、その仮屋の前には芝舞台という舞台があります。その仮屋に神様をお遷しする。そして、この芝舞台では、次の日に一日かけて様々な芸能がこの神様に対して演じられる。本社では演じないんです。あくまでも御旅所のほうで様々な芸能が演じられて、それが終わった真夜中にまた再びすべて真つ暗にして御霊を若宮社のほうにお帰しするというをやっています。

ということを見ると、基本的に御旅所のほうで芸能は奉じられる。そうじゃないところももちろんあるのですが、そういうかたちが一つの古いかたちなんじゃないか。もうすこし言う、御旅所のほうが実は本当の神様がいらっしゃる、京都に石座神社というのがありますが、石

座神社というのは本当に磐座、大きな岩ですね、これが御神体といわれています。ところが、そっちのほうではなくて、お社を建てて、皆さんはお社のほうに向かって願ひ事やなんかをしています。だけど、本来、お社というのは仮に移して、拝礼しやすい施設であったり、神様を本当のところからお迎えしてきたりする施設。

じゃ、われわれは神社に行って神社で盛んにお祈りをするけれども、神様がいないんだったら、お祈りは無駄じゃないかと。そんなことはないんです。あの建物というのは、結局は神様のところまで通じている。神社関係の人たちの学会でこんなことを言っただけじゃないかと思うのですが、神社に行ったとき、基本的にほくらは何をするかというと、まず柏手を打ちますよね。出雲大社は四つ打つんですが、普通は二つ打ちますね。あの柏手というのは何だと考えているかという、あれはこれから物事をお願いする自分がここにいますよという、自分の存在を神様に知らせる音だと思うのです。柏手を打つ。その後には鈴をジャランジャランと鳴らす。あの鈴がジャランジャランと鳴るのは何か。実は鈴が鳴るのは神様がそこに存在していますよという神様側の返答だと思うのです。

これは巫女舞の話をするとよくわかるんですが、巫女さんが鈴を振るのは、本当は巫女が鈴を振ってはいけな

いです。巫女さんが回って回り返すという動作をしているうちに、巫女の体の中に神様が降りる。そうすると、しぜんと震えて、手に持った鈴、この鈴は高く持つてないといかないのですが、高く持つているこのところに体の震えが伝わってきて鈴が鳴り始める。鈴が鳴り始めるということは、巫女さんに神様が乗り移ったという印。だから、鈴の音というのは、基本的にそこに神様がいますよという神様側の音だとはくは思っているわけです。ところが、実際に神社に行っても勝手に鳴ってくれるわけではないから、こちらがジャランジャランと鳴らしています。それからお賽銭をあげてお祈り事をして、いちばん最後にもう一回自分の存在を柏手を打ってお願い事を終わる。

でも、神様はそこにいなくても、結局は本来神様がいるところにつながっている。祭祀の時は神社の本殿に神様をお迎えするわけですから、拜殿でとりあえずお祈りをするれば、基本的には神様のところに通じるのではないかと思うのです。ほくはたいへん大雑把な言い方をしています。そんなことじゃないと神道の方から怒られるかもしれません。大雑把なことを言うと、祭祀と芸能の関係はそういう関係なのかなと思ったりしております。

実はいま京都では祇園祭が行われている時期です。祇園祭というのは七月一日から七月三十一日の一か月間、祭り

の期間があると言われていますが、あんなことを言い始めたのは最近です。昔は旧暦の祭りですから、七月一日から七月の末までということはないんです。あくまでも旧暦の六月七日から十四日が先の祭りと後の祭りのあいだですけれども、もちろんそれ以外の日にも様々な行事はあります。

祇園祭は実は二つあります。一つは祇園社、いまは八坂神社と言っています。八坂神社という名前は明治以降の名前で、それ以前は祇園社または祇園感神院という名前をもっていました。要するに神仏習合の時代には比叡山を支配下にあつた神社です。実はあそこのご祭神は神道的に言えばササノオノミコト、その奥さんのクシナダヒメ、もう一つが八王子神。三基の神輿が出ます。この三基の神輿が渡御する。これは平安時代末期の『年中行事絵巻』にすでにその姿が描かれていますから、平安時代後期にはこのかたちはできていたと思います。

ササノオノミコトというのは神道的な考え方で、仏教的な考え方をすれば牛頭天王ですね。それから、女性のほうの神様は波梨采女といわれている。八王子神がそれにくっついていてというのは、平安時代中期ちよつとあとぐらいに祇園社自体の支配が比叡山の支配下に置かれるようになりますから、その時に比叡山の神様である八王子神が入ってくる。それで三基の神輿になっていくのだと思いま

す。それが今でいいますと、七月の十七日の夕方に祇園社を出発して、御旅所まで行って、二十四日まで御旅所に滞在する。還幸祭の時には京都中の主なところを三基の神輿がばらばらになって回って、それで夜中にまた再び祇園社に帰ってくる。これは神社側の行事です。これはすでに平安時代から始まっている。

でも、本当のことを言うと、平安時代から始まっている祇園の祭りは正式名称は祇園御霊会といえます。御霊を静める。スポンサーは天皇や貴族です。彼らがスポンサーとなって、ちよつど梅雨の時期には疫病がはやるので、当時、平安京に蔓延したそれを御霊の祟りだとして、この御霊を鎮めるために始めた。しかし、ここでよく考えてください。御霊会なんです。「会」というのは何か。これは法会ですね。神事ではない。だから、御霊会といった場合は、神社側の行事というよりも、寺院側、法会です。それが結局は祇園祭になっていきますけれども、御霊会を祭りだと考える。御霊会といったら、やっぱり法会ですよ。それが今日までたいへん大きなかたちで行われていた。一応三基の神輿渡御というのは現在でもそのまま行われている。

ところが現在、人気があるのはこの三基の神輿渡御ではない。何かというと、町衆の側が演じる山鉾の巡行。こちらのほうに見物人が多く集まる。今年一基増えましたから、

全部で三十三基出ることになりましたけれども、各町が山や鉾や傘鉾もありますが、そういうものをたいへん美々しく飾って出してくる。しかし、この行列は神社には一切行きません。現在でいうと、七月二日に各鉾・山の総代が社参をします。全員で社参するのは一日だけです。それから長刀鉾の先頭に乗っているお稚児さんが一応一回だけ社参をします。五位の位をもらいに行く「位もらい」ということで、一回だけ社参をします。この行列はそれ以外神社には行かないんです。あくまでも町の中に行く。

それはなぜかという、町の中に梅雨の時期に蔓延している疫病、当時の言い方をすると疫神が蔓延するから疫病にかかると考えて、この疫神を集めて回る。だから、鉾とか山というのは疫神を集めるための神座です。悪い神様を集めるための神座です。ですから、自分たちの町の範囲はぐるっと回らないといけない。先の祭りと後の祭りの二回に分けて、同じものじゃないのですが、違う山や鉾が同じ下京の中をぐるっと疫神を集めて回ります。集めて回って帰ってくるとすぐに、山鉾もその日のうちにすぐ壊します。本来は集めて回った疫神は鴨川あたりに流さないといけないのでしようが、それは今はやっておりません。

逆に何をやっているかという、町の人たちは集めてきた疫神を家にお迎えして、家の神棚でお祀りしています。こ

れはなぜかという、そういう悪い神様も自分の家にお連れして、自分の家で丁寧にお祀りすれば、自分の家の味方になってくれて、あとから入ってくる悪い神様を追い出してくれる。神様というのは悪い神様であろうと、ちゃんと祀れば自分たちのことを守ってくれる神様になる。そういう考え方で、いま京都の町の古い人たちは注連縄とかいろいろなもの切れ端をもらって、自分のところの神棚でお祭りをしています。観光客はそんなことはわからないから、みんながもらうからいろいろなものをももらって、家を持って帰ってきてはったらかしておく。これはいちばん疫神を怒らせる方法なんです。

実はもう一つ、あまり言われてないことを申します。現在七月十日、丁度昨日行われたのが、神輿洗いという行事です。この神輿洗いという行事は祇園社に三基の神輿があるのですが、その三基の神輿の中の真ん中の一つ、牛頭天王を祭神とする中御座といわれる神輿ですが、この神輿が鴨川まで行って、鴨川の水で神輿を洗うと称しています。江戸時代にすでに神輿洗いといわれています。神輿を洗って神社に帰ってくる。そのときに、途中に位置する祇園町の人たちが、提灯迎えということをやります。いまでも提灯迎えはやっていますが、そういう行事が残っている。それから、祭りが終わった、現在でいうと七月二十八日の日、

もう一回神輿洗いに中御座が鴨川まで渡御します。いまは四条大橋の上で鴨川の水をくんでそれにちよつと掛けるというぐらいのことしかやっていませんが、それでもいいんです。十日と二十八日に現在でも神輿洗いをやっています。

神輿洗いという言葉は江戸時代にはすでにいわれている。これは一体何なのか。神輿洗いだったら、本来なら三基とも洗わないとおかしい。一基だけ洗うのはおかしいと思うのですが、鴨川に行くのは一基だけです。本来一体何を目的としてやっているかというと、私の考えとしては、実は祇園社は鴨川の神様をお迎えに行っているのだと思うんです。神輿を洗うのではなくて、鴨川の神様を中御座にお移して神社にお迎えしている。だから、一基でいいのです。その道沿いに住む人たちはお迎え提灯。夜やりますから、提灯を掲げる。お迎え提灯というからは、神様を迎えるための提灯を掲げる。というのが、お迎え提灯の本来の意味。だから、あれは洗いに行くのではなくて、この時期に鴨川が氾濫する、あるいはいろいろと京都の中の水が氾濫して疫病が起る、その元凶である鴨川の神様を神社にお迎えするという習俗。神社側では決してそういう習俗は認めませんけれども、本来習俗である。そして、お祭りが終わった二十八日に、今度は鴨川の神様を川にお帰しする。それがあとの神輿洗いだと思うのです。ですから、八坂神

社、前の祇園祭では正式の神様であるスサノオノミコトだなんだかんだということ以外に、鴨川の神様自体もちゃんとお祭りをしているんだと考えております。

というのは、もう一つ証拠があるんです。いま皆さんが夏に京都に行くと、夏の風物詩といって鴨川に床が出ています。鴨川の両側ではなくて、西側なんですけれども、西側のお茶屋さんとかそういうところが鴨川に対して床を出している。江戸時代にも床は出てます。いまみたいな床ではなくて、鴨川の流れ自体に戸板を渡して、そのところでみんながお酒をくみ交わし、けっこうどんちゃん騒ぎをやっている。ところが、この鴨川で床が出る日というのは、江戸時代は決まっていた。ぼくが初めて京都に行った時も七月しか出せなかったのですが、いまは五月ぐらいから出しています。本当はいつから出せたかということ、神輿洗いの次の日から床を出している。それから、あとの神輿洗いの前日まで。要するに、鴨川に神様がいないあいだだけ人間が鴨川に板を渡して、床几やなんかを出して、そこで酒を飲んだり料理を食べたりすることが可能であった。これは江戸時代の記録を見たら、そういうふうには書いていませんけれども、いつからいつまでという制限が出ています。その制限を見ると、神輿洗いの次の日から次の神輿洗いの前日まで。これはやっぱり鴨川に神様がいないゆ

えだなどと思わざるをえないところなんです。いまやそんな規律はなくて、商売のために五月になったら床は出しています。鴨川の床というのは、そういう意味では本来祇園祭と関係がある。

もう時間がなくなってきたのであまりいろいろなことが言えなくなってしまったのですが、もう一つだけ付け加えておきますと、京都の祇園祭の山鉦巡行をご覧になった方、またテレビやなんかでご覧になった方はたくさんいると思いますが、いちばんのハイライトは何か。四条通りを長刀鉦を先頭にして東に向かって巡行してくるその先頭の長刀鉦の上のお稚児さん。実は鉦には全部、正式にはお稚児さんが乗っていたんですが、お金がかかりすぎるといって、いまは長刀鉦しか乗っていません。その長刀鉦のお稚児さんがちょうど四条麩屋町というところに張られている注連縄をバサリと切るという行事が一つの大きなハイライトになっています。

ところが、あの行事が始まったのは昭和三十一年なんです。それ以前はあんな行事はないです。巡行路も違うんです。でも、江戸時代の記録を見ると、先頭を行く長刀鉦町の役人が御旅所まで行って、御旅所の注連縄を切るということをやっている。やっているのですが、山鉦の巡行の順路が昭和三十一年から変わるんです。三十一年以前という

のは、ちょうど寺町通り、これは東京極大路なのですが、行列がそれを南に下がっていった。ところが、昭和三十一年から寺町通りを上がる（北行する）ことになった。その時に先頭を行く長刀鉦の稚児が注連縄を切るという行事を始めた。当時の新聞を見ると、ちゃんとそのことが書いてあります。書いていますけれども、京都人はそんな新しいことだということを決して言いません。

京都というところは非常に古いものが残っています。非常に新しいものも始めています。でも、その境というのは黙っています。よそから来る人たちが古いと感じてくれれば、それはそれでいいのです。そういうところのずるさと言ったら怒られますが、京都のもっている奥深さに決してだまされてはいけません。いいんですよ。あれはなかなかいい行事ですから、それはそれでいいんですが、歴史的にいうと、昭和三十一年が最初なんだと。山鉦の巡行も先祭りとは後祭りがあつたんですが、それは昭和四十一年に合併してしまって、先祭りだけになってしまった。ところが、去年から後祭りと先祭りをまた分けてやるようになって。それからまた、巡行路というのも、本来は寺町通りを通っていたのですが、狭すぎるといって、河原町通りを通ったり、三条通りを本来通っていたのを広い通りである御池通りに変えたりとか、そういう様々な変化はさせて

います。

いいんです。祭りというのは、古い要素もちゃんと残さないといけないけれども、時代とともに変えていく部分があっても、ぼくはいいと思います。でも、それは古いところ、新しいところ、はつきりさせておかないといけません。時代とともにどんどん変わっていくというのは、ある意味あたりまえなのです。だけど、歴史を考えた場合には、何が古く、何が新しいのかということはきちつと研究をし、勉強をし、正しておかなければいけないのではないかと思えます。きょうは「祭礼と芸能」ということで勝手な話をさせていただきますました。とりあえずこのくらいにします。

山・鉾・屋台・山車行事

—期待されるユネスコ無形文化遺産—

福 原 敏 男

ただいまご紹介いただきました武蔵大学の福原と申します。本日はよろしくお願いたします。國學院の大学院にも出講しております。こちらは私の母校でございます。学部が日本史、大学院が坪井洋文先生と私の指導教員が神道、平井直房先生も神道にいらつしゃいました。ドクターが日本文学というか、博士号は倉林先生、伝承文学というところとりましたので、歴史、神道、伝承文学という感じで学生の時には勉強させていただきました。

本日は都市の祭礼、風流祭礼ということを三十分お話しすることを委託されております。ここに出ております山・鉾・屋台、そして東日本では山車という名称がなじみ深いのでしようけれども、それに関して実はユネスコの無形文化遺産、お祭りに関してはご存じない方もいらつしゃると

思います。和食とか、昨年の和紙の三か所の製作技術などでだんだん浸透してきたユネスコの世界遺産、記憶遺産、無形遺産という三つの柱のうちの一つです。私が学生の時なんかは、研究者はあまりこういう指定の問題なんかに見を言うものではないという風潮が多かったと思うのですが、そののち、限界集落とか民俗文化を伝えられる現場というのが非常に危機感が募ってまいりまして、指定されることが現地での一つのモチベーションになっていくということもありまして、早ければ二〇一六年の秋に現在三十三か所候補の山・鉾・屋台・山車行事が一括でユネスコに無形文化遺産に登録される可能性がある。実はこれはまだ可能性で、予断を許さない。ついこの前も明治期の日本の産業文化に関しても記憶に新しい外交的な様々な問題が生

じたわけです。この山・鉾・屋台・山車行事などは、お祭りに外国の方が強制的に徴用されるようなことはないのも、政治的な問題にはならないと思いますが、いずれにしても、こういうものは予断を許さないといいことですので、なったらいいなということでお聞きいただきたいと思えます。

まず、二〇一四年の三月に政府が三十二の山・鉾・屋台のお祭りを無形文化遺産に登録してほしいということで、イコモス（ICOMOS）というパリにあるユネスコの機関に上げたわけです。様々な問題があつて、三十二も一緒ということだと、イコモス側のスタッフの検討する情報量と職員の数の問題ということがありまして、本当でしたら今年の秋ということだったのですが、来年の秋に一年先送りにされた。

まず見ていただきますのが、三十二の保存会が合わせてつくった十分間のプレゼンテーション映像であります。実は今年の三月に国指定の重要無形文化財になりました岐阜県の大垣祭というのが滑り込みセーフで、再提案のときに入りましたので、私の表には三十三か所ありますけれども、この映像は一年前のプレゼンテーション映像ですので、三十二か所あります。きょうは三十分で、このプレゼンは十分間。本来は止めながらご説明したいところなのですが、とても時間が足りません。英語でのプレゼンですが、流

しつ放しにして、音声は低めにして、私の解説を入れるということにしたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

これは青森から大分まで三十二か所、現在は岐阜県の大垣が加わっているということです。これをもって政府間協議ですね。来年なんとか無形文化遺産になるべく、大使の方たちが協議をする、説明をする、説得をするということ。まず初めに、いまの山路先生のご講演にもあつたように、祭りの中の祭りの祇園祭。それ以降、いちばん初めに国指定になった岐阜県の高山、そして茨城県の高山、これは「ふりゅう」ではなくて「ふうりゅうもの」、そして埼玉県秩父祭など、かなり初期、昭和五十四年ぐらいにいちばん早く国指定になったのが、いちばん先頭に出ているわけです。

なぜいちばん初めに出ているかと申しますと、京都の祇園とか富山県の高岡御車山とか常陸の風流物とか秩父祭は、国指定の有形文化財と無形文化財がセットになっているということ、この五か所が初期プラス有形プラス無形というプレステージをもっているのです、いちばん初めにこの映像でも出てきます。プラス、全国の山・鉾・屋台の保存連合会というところでもこの五つが初期のメンバーとして実力をもっているというのが現状だと思えます。事務局も現

在は埼玉県の秩父市の教育委員会の中に全国山・鉾・屋台保存連合会というのが置かれておりまして、国指定になるということとこの山・鉾・屋台連合会の正会員になるというこの二つをもって、ユネスコ無形文化遺産に登録というのが現在三十三か所ということであります。

山路先生のお話はご本殿とかご社殿の中に神様を迎えるという本質的なお話だったのですが、日本の場合、ご承知のように政教分離の原則がありまして、行政が関わる無形文化財指定の場合もご社殿の外、つまり神主さんが神社の総代さんなんかを迎えて玉串の奉奠をやるというような祭式のところは指定の対象になっておりません。京都の祇園祭の場合も山・鉾行事。すべて屋外、氏子地域で行われる御旅所への巡行、芸能奉納、そしてまた帰ってくるというその場面での指定になっております。プラス、現在ではそういう祭式、行事のことは、神道のなかでは神賑かみねわいと書いて、近現代の神道用語では神賑かみねということと、どっちかという付属的な行事なのでしょうが、この山・鉾・屋台行事では中心というか、それこそが指定の対象になるということでもあります。

もう一つ、たとえば青森県のねぶた祭、弘前のねぶた祭、長崎のおくんち、こういうものは入っていません。いろいろなことがあったのかもしれませんが、私が考えるに、そ

れこそ風流の祭礼ですので、毎回毎回趣向を変えるというところが一つのポイントで、長崎のおくんちの場合は七年に一度踊町が毎年回ってくるわけで、そのたびに出し物が変わるので、こういうお祭りには入ってないのかなと思っております。

この映像には外国の方に理解していただくために、準備、宵宮、本祭、そして終わったあと、たとえば車輪などを川に持って行って、メンテナンスをつけておくとか、そういうお祭りの全体像みたいなものも英語で説明するということになっております。

地域的には、残念ながら中国・四国の国指定民俗文化財がありません。非常に多いのは中部ですね。中京地域に多い。実は関西もあるようでそんなにないんです。奈良、兵庫はありません。そして、九州にいくつかというのが現在の無形文化遺産、山・鉾・屋台行事の候補です。

私は今回、東日本でやるので、皆さんのなじみ深い「山車」を入れましたけれども、本来はこういうお祭りの山車だけではなくて、たとえば戦国時代の兵士が背中につけている矢をよけるような母衣ははこのてっぺんとか、上につける突起物を「出し」「出シ」と表して、少くとも中世以来、普通名詞として用いられてきた言葉なのですが、これが江戸のお祭りではある構造物の突起物、上端を「出し」と書いて

た。「山車」と当てられたのは、やはり近代以降だと思えます。関西のだんじりのほうがメジャーの言葉で、近代になって山車と当てられても、それはマイナーな成立。使われるのも、まずは東京周辺であって、それは情報などの東京の極集中ということがありまして、現在は大阪の岸和田の子供たちも「ここではだんじりやけど、ふつう山車だなあ」というふうテレビなんかでも説明するということになってると思います。

京都の祇園祭はもちろんいちばん中心として入っているのですが、これからお話しくださる岸川先生が中心にされる神田明神祭。あるいは永田町の山王祭。これらは江戸時代の祭礼番付では、三都の三大祭りとして京都の祇園祭、それから現在七月二十四、五日に行われる大阪の天満天神祭とともに知られていました。そして江戸の山王祭。神田祭は隔年で行われます。大阪天神祭は船渡御とか神渡流しみたいなものは残っていますけれども、山・鉾・屋台行事の対象になるようだんじりのお祭りはあつたんです。江戸期から近代にかけて大阪のだんじりも非常に盛んだったのですが、それがモーターゼーションとか、あまりにも大きな都市の変貌が大きく消えていきました。江戸の山王祭と神田明神祭の残像も明治二十年と二十二年ぐらいを最後に帝都東京から消え去っていった。様々な首都としてのイ

ンフラストラクチャーの整備、あるいはモーターゼーションという大きな時代の変貌中で、三都の中では京都しか山・鉾・屋台の伝統が残っていない。

このほか名古屋、鳥取、岡山、仙台とか、和歌山東照宮のお祭り、和歌祭りですね。これら東照宮のお祭りが城下町祭礼として、町方の祭礼として風流の祭礼になっていったところもありました。和歌山の和歌祭は形を変えつつ復活している所があります。明治維新以降、その前代のお祭り、つまり徳川家康を祭ったお祭り、東照宮のお祭りは消えていった。消されていったという歴史があります。各地の東照宮祭礼がそのまま大きな城下町祭礼だったようなところは、スポンサーもなくなり消えていったということもあると思います。

プリントをご覧くださいと、山・鉾・屋台行事登録候補の中で東北でも岩手、宮城、福島などはありません。千葉、東京、山梨、福井県などはありません。非常に多いのは中部。岐阜が三、愛知が五、三重が三。京都はもっと多いかと思いきや、京都の祇園祭だけあります。そして中国・四国がなくて、九州に五つということでもあります。ねぶた、ねぶたが対象でないという理由は先ほど早口で申し上げました。

実は、「山・鉾・屋台行事」が正式名称で、山車という

名称は正式の政府からの提案の中には入っていません。これは一つは京都祇園祭中心的な考え方ですよね。山・鉾。現在は大船鉾が入ったので三十三ということなんですけれども、京都の場合は笠鉾二本なのです。全国的に屋台というのが多い。文化庁が主導して四十七都道府県で行っている祭・行事報告書というのがかなり全国的に網羅されて、そろいつつあるのですが、この中でも「山・鉾・屋台、こういうのはありますか」という質問項目です。やはり京都の祇園祭を中心とした民俗語彙がそのまま文化庁にも踏襲されて、こういうところの登録名称にも反映されているのかなと思います。

また、なぜ今回こういうお話をしたかといいますと、これから登壇される今回の仕掛け人というか、プロデューサーであります國學院大學の神道文化学部教授の茂木栄先生を中心に、曳山のお祭りの共同研究が行われました。私が入っておりませんけれども。これは神社本庁が制作した「平成祭データ」というのが一九九〇年から九五年まで六年間かけて全国にアンケートをしました。その中で山・鉾・笠・屋台・山車・だんじり・その他という七類型に分けたアンケートを実施したわけです。そして、國學院大學の伝統文化リサーチセンター「神社祭祀に見るモノと心」グループが分析をした結果、屋台・山車・だんじりが突出

して多い。それに次いで山があるということもわかり、全国総計で七千九百八十三社のお祭りを数えるというデータがあがってきました。

私などはずっと元京都学園大学教授の植木行宣先生という先生に非常にお世話になって、文化庁の調査官などという調査研究をやりました。私たちのデータでは千四、五百件の山・鉾・屋台行事が伝承されています。これは三十六都道府県の文化財の専門家、芸芸員たちよりかなり詳細なアンケートデータが出ました。その時に千百件あがってきた。データは三十六都道府県のうち千百。文科省の科学研究費を取ってお願いしたのですが、十一の都道府県からはデータはあがってこなかったのです。おそらくあと十一の都道府県、残りが出たとしても、千五百ぐらいだろうということです。植木行宣先生は、山・鉾・屋台、そのほかに山車とかだんじりとか曳山とか立物とか船とかねぶたとかねぶたとか、全国の様々な造形、多種多様な名前、御神輿以外の祭祀風流、日本のお祭りを彩る様々な造形物は約千五百ぐらいだろうと考えて、ご著作でもいろいろ述べられております。私もそれにのっとなって書いています。が、実は私のフィールドであります愛媛県の西条祭に行きますと、行くたびに増えているようなところもたしかにある。

おそらくこの茂木先生中心でなさいました國學院大學の曳山プロジェクト特集、山車・屋台・曳山特集二〇一一年で出た約八千件というのは、とにかく神社庁のアンケートを正確に客観的に全て分析したものですから、新しい、伝統的なものを問わず対象としたものでしょう。たとえば地域の町内会のレンタルだんじりみたいなものも入れての総計が八千になり、文化庁が植木行宣先生の発想で始めた調査の千五百というのは、もちろん前近代にルーツがあるもの限定とは言いませんけれども、かなり地域に根ざした、明治・大正・戦前ぐらいまでさかのぼれるようなものを総ざらいして千五百。この八千と千五百の違いというのはこういうところ、つまり、宗教社会学的なアンケート調査をもとにしたデータなのか、歴史民俗学的な根っこが戦前ぐらいまでのところをもとにしたデータなのかということに大きな違いがあると思います。

実は先週、民俗芸能学会で私は依代百年という話をしました。折口信夫の「髻籠の話」発表百年ということ、柳田國男が「郷土研究」の編者だったものですから、折口が一九一四年に投稿したものを、柳田が『神樹篇』という、先ほどの山路先生のお話ですと、心御柱みたいな柱説をまず自分のオリジナルとして先行させたいがために、折口の「髻籠の話」の三連載をさせるのを遅らせた学問の先陣争

いで二人の出会いが初めから緊張感に満ちていたものというので有名な学史上いわくつきのエピソードになっています。

その折口が「髻籠の話」というのを発表したのが一九一五年です。そこで招ぎ代と依代。人間の側から見ると柱の上に人工的な依代を設けたところに去来神を降臨させる。人間からすると、おぐ、招く、神様側からすると寄りつく、憑依するというものを発見した。それが移動神座である御神輿だけではなくて、このような山・鉾・屋台・山車にも神様がよりつく。先ほどの山路先生の山・鉾だと疫神ですね。やはり病が流行する時期に疫神をつけて、地域の氏子地を回る。そして、夏祭りでしたら、疫神を集めて燃やしたり流したりする。ねぶたなんかもそうなのでしょうけれども、様々な形態がある。そのようなかたちで折口信夫が百年前からこういう山車・だんじりの、あるいは髻籠の研究も始める。

そのあと文化庁では、この折口の直弟子であります祝宮静さん、一九五九年に「やまのうつりかわり」という論文をお書きになります。これは『講座日本風俗史』というところで、師匠の折口の説を敷衍していったわけです。祝さんは四段階あるとした。一番は本当の霊山、霊場、聖地に対する信仰。二番目は臨時につくりものの山を里に迎える。

これは兵庫県の、昨年二十年に一回の三ツ山が行われましたが、移動しない置き山。あるいは富山県の高岡のそばの放生津などに見られますような築山や茨城県烏山山あげ祭など、臨時に作り物の山を里につくって山の霊力を里に迎える。三番目は特定の場所に据え置いた作り物の山を移動させるようになった。常陸の風流物とか、五月三日のでか山と通称される能登七尾の青柏祭のように特定の場を迎えておいた作り物を山を移動させる。そして四番目は、山の象徴が薄れ、こんにちの山・鉾・屋台・山車・だんじり・曳山のような移動式の舞台のように飾り物を台車に乗せて華やかに飾った曳きものになった。つまり、折口の百年前の髻籠の話祝さんが四段階に分けて一九五九年に説明する。

その文化庁見解は日本の様々な文化財行政に影響して、こういうものが出ると、依代なんだという説明が非常に多くて、だからこそ国指定なんだというところも非常に多いわけです。それに対して二〇〇一年の植木行宣氏の『山・鉾・屋台の祭り 風流の開花』（白水社）というところで、依代と一言で言ってしまうと、何でも依代ということ、去来神がそこに顕現するという自動説明装置になると、ちよつとブラックボックス的になってしまふので、もうちよつと造形を考えてみようということで、植木先生は囃

す／囃されるという機能的な問題も考慮された。祇園祭の鉾という非常に背が高い縦型のものに神が依りたまう、これが囃されて移動するもの。そして、移動式の舞台なんかはそれを囃す山。つまり、囃す山と囃される祇園祭の鉾というふうに分けて考えてみようというように、研究も、とくにこの二十一世紀になってからまたずいぶん進化した。できましたら、来年の秋にユネスコの無形文化遺産に三十三件一括で登録されることを願ひ、そして、こういうものが地元でもずっと伝承されることを願ひまして本日のお話をさせていただいたわけです。では、時間がまいりましたので、私の話は以上にさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

江戸・東京の祭礼文化

岸川 雅範

皆さん、こんにちは。神田神社というより、神田明神と
 いったほうがわかりやすいと思います。神田明神で神職を
 しております岸川と申します。よろしくお願ひします。

これから「江戸・東京の祭礼文化」について神田祭を事
 例に話をさせていただきます。今年平成二十七年は神田明
 神が一六一六年に現在の地に遷座して四百年目の年にあた
 ります。というわけで、今年は遷座四百年奉祝の神田祭が
 行われました。この現代の神田祭、さらには、江戸時代後
 期になります。文化・文政頃の最も盛り上がった神田祭、
 この両方を比較したうえで、江戸・東京の祭礼文化の変遷
 というのを皆さまに知っていただきたいと思ひます。まず
 江戸時代と現在の神田祭について、日程、巡行路、さら
 はお祭りの行列の構成、とくに神輿、山車、附祭・御雇祭

を比較しながら見ていきます

まず現在の神田祭ですが、平成二十七年を例にしますと
 五月七日から十五日、約一週間神田祭を行いました。その
 前年より氏子の方々と祭典委員会また、警察関係の方との
 会議、また例年インターネット上で生中継しますので、そ
 ういった打合せがありますけれども、日程的には鳳輦神輿
 遷座祭が第一日目となります。神田明神の三柱のご祭神、
 大己貴命、少彦名命、平将門命を鳳輦と神輿にお遷しす
 る神事で夜行っております。真つ暗な中で執行しますが、結
 構な見物人がいらつしやいました。

二日目は、氏子町会神輿神霊入れを行います。現在、神
 田明神の氏子は百八町会あり、各町会が大人の神輿、子供
 の神輿、単純計算で二百基近い神輿があります。各町会神

職が神輿にお遷しする神霊入れを行います。

三日目、九日土曜日は神幸祭です。七日に鳳輦神輿遷座祭でお移りになった鳳輦神輿を含めて、だいたい千人ぐらいの行列が百八の町を巡行いたします。

次の日は神輿宮入。神霊入れをいたしました町会の神輿、約八十基の神輿が神田明神に朝から晩まで宮入参拝をするという行事が行われます。この神幸祭と神輿宮入というのが神田祭のメインの行事になって、土日に行われます。

氏子区域の秋葉原の電気街でもだいたい五十基ぐらいの神輿が担がれております。神社に宮入するだけではなく、宮入していない神輿も当然この十日にそれぞれの町を渡御いたします。その中でも一番大きな御輿が、旧神田市場の中にあります江戸神社奉賛会という会が持っている江戸神社の御神輿になります。江戸神社は神田明神の摂社です。

神田の神輿は人が乗っちゃいけないというお約束なんです、この江戸神社には三人、人が乗るようになっていきます。この江戸神社の神輿の社紋なのですが、よく見るとお稲荷さんのものなんです。江戸神社なのでスサノオノミコトをお祭りしているのですが、なぜか紋がお稲荷さんの紋になっている。非常に不思議です。

神幸祭と神輿宮入という非常に盛り上がるお祭りが終わったあとは、明神能・幽玄の花、金剛流の薪能の奉納。

また、表千家家元による献茶式が行われます。明神能は、実は平成十五年から始まったのです。表千家の献茶式も昭和三十八年から始まった神事になります。明神能をなんでも始めたかといいますが、実は江戸時代初期に神田祭の原型とも思われるのですが、神事能が行われていたという記録があるんです。ただ、記録によると享保年間、八代將軍徳川吉宗ぐらいの時に断絶してしまいます。舞台が燃えてしまったり、演者の出演料が払えなくなってしまうとか、そういった原因で断絶したそうです。

最終日、五月十五日、例大祭を行います。この例大祭は毎年行っております。一年の中で最も重要な氏子の平和を願う神事です。

そういうわけで、約一週間にわたり神事が行われる。直会等々も行われますけれども、神田祭一週間、現在はこのようなかたちで行っております。

それでは、江戸時代の神田祭とはどのようなものか、まず日程をご覧いただきたいと思います。八月から寺社奉行とのやりとりとか、町人たちとのやりとり、社殿の畳替えなどを行いつつ、九月六日にまず神輿飾りをします。神輿舎から神輿を社殿の中に出してきて、日本橋の馬喰町の附木店講中に飾り付けをします。その後、前斎神事を行い、十一日に神霊を神輿にお遷しする。さらに十三日には武家

屋敷等々、各町、各家でお祭りの準備をしたりする。そして十四日の夜に、斎夜神事として神職がご社殿の中で神事を行います。

この神田祭ですが、九月十五日、一日かけて行われます。

江戸時代の神田祭は先ほど福原先生から言っていたかきましたけれども、山王祭とともに天下祭といわれています。それはなぜかという、江戸幕府の公式年中行事として、江戸城・内曲輪の中に入って、時には將軍さま、御台所、奥女中が上覧したお祭りだったからだといわれています。

現在と違うのは、九月十六日に祭礼お礼参りということ。お祭りの装束を着た町の人たちが神社にお参りに来る。それを見るために見物人も多く殺到したというふうに、江戸時代の『東都歳時記』という江戸の町名主・齋藤月岑が編纂したものには出てきます。その日に同じく神璽を神輿より本殿にお帰して神田祭は終わっていきます。そのあと解斎したりとか、警護の鳶の者が町奉行所に呼ばれて、お褒めの言葉をいただいたりとか、細々と十一月ぐらいいまあるそうですけれども、おおよそ九月、このようなかたちで江戸時代の神田祭は行われます。

今度は巡行路、お祭りの行列がどのような道筋をたどったかというのをご覧いただきたいと思います。現在は、神幸祭の日、まず五時に御鍵渡しを御行い、神輿の庫をあ

けます。これは宮鍵講という神田明神独自の講中がありまして、そちらの人たちが鍵を取ってきて扉をあけます。これが実は、先ほど言った江戸時代の馬喰町の附木店講中の継承者たちです。

平成二十七年の神田祭の巡行路ですけれども、朝の八時に発聲祭というお祭りを行いまして、江戸消防記念会の鳶の頭たちが集まって、木遣りの歌とともに神社を出発します。まず将門塚に行き、奉幣の儀という儀式を行います。将門塚はご祭神の平将門公の御首をお納めしたお墓だとも言われていますけれども、それとは別に七三〇年に神田明神が創建された場所でもあるんです。ですので、旧跡地に立ち寄ることです。そこで奉幣の儀を行う。

そして両国に行きます。神田明神は百八の氏子町会があります。非常に広いんです。だいたい道のりは三十キロあるといわれています。もともと両国には御飯屋がつくられていました。そちらの旧御飯屋の両国で昼御饌というお祭りをいたします。今度は、中央通りに出まして、附祭という賑やかな行列が加わります。そして、三越の前中央通りがメインストリートになって、見物人も非常に多くて、非常に盛り上がる場所になります。中央通りをそのまままっすぐ行くと、秋葉原の電気街に着きます。ここです。五時ぐらいいになります。最後は七時ぐらいいになります。

神社に帰ってきまして、着輦祭を行い、この土曜日の神幸祭の日程が終わります。これが巡行路になります。

ちなみにここで申しておきたいのは、江戸時代の神田祭は九月、現在は五月です。これは明治二十五年に変更されたものです。九月が、新暦になりましたが雨が多くて疫病がはやる時期だったので、五月にしたそうです。現在は神幸祭と神輿宮入というのが中心のお祭りになりますので、現在と江戸時代のお祭りの巡行のかたちも違うということとは理解できると思います。

江戸時代の神田祭は、湯島聖堂のあたりに馬場がありまして、山車とか氏子町の行列がそこに集合して神社の前を通るんです。山車が神社の中に入ることはなかったです。附祭もそうです。山車が通り過ぎて、真ん中あたりに神輿二基が合流いたします。

その後、筋違橋御門の中に入ると江戸城の中に入ります。江戸城は巨大で、外曲輪と内曲輪に分かれてまして、筋違橋から外曲輪に入る。だから、神田の人たちというのは江戸城の中に住んでいたと言えると思います。外曲輪をどんどん入っていきまして、今度は田安御門より江戸城の内曲輪の中に入ります。今の靖國神社と日本武道館のあたりですね。あのへんから武家がいっぱい住んでいる武家屋敷のある江戸城の内曲輪の中に入っていきます。

内曲輪の中に入ってどこに着くかというところ、上覧所、將軍さまたちがご覧になる場所に着きます。そこで將軍たちが上覧したり、あとは御三卿とか屋敷がそこら中にありましたので、そちらにいつて、山車とか附祭という仮装行列を見ていただいたという記録が見られます。

最終的に常磐橋御門から内曲輪を出ます。

この神田祭、江戸時代の行列ですが、湯島聖堂の馬場のところに集合するのが午前二時です。夜中に集合して、昔は山車の巡行で、非常にゆっくり巡行いたしますので、遅くに出発すると江戸城に間に合わなくなってしまう。なるべく昼に着かないといけなかったらしく、夜中のうちから出発していたのでしよう。そして、午前中にお昼ごはんを食べて、午後の上覧所前を通って、だいたい夜の八時ぐらいに帰ってくるというのが江戸時代の巡行路でした。

その行列なのですが、三つに分けさせていただきました。神輿の行列と山車の行列、あとは附祭、御雇祭という行列。現在も江戸時代もこの三つの行列に分けられると思います。まずいちばん大事なのは神輿ですね。江戸幕府によって神田祭の神輿というのは新調されたり修復されたりしました。これは非常に大事なので、江戸幕府の公式の年中行事としての証でもあると思われれます。そのほか、この担いでいる人々も南伝馬町、大伝馬町、日本橋に現在もあります。

が、その町の人たちのみが神輿を担いだ。もしくはそこで雇った人足たち。これは国役として奉仕したわけです。ですから、氏子も氏子だったから担いだわけではなくて、江戸幕府の国役を負った町だったので、命じられて神輿担ぎを行ったということ。これも天下祭りという江戸幕府公式のお祭りとしての証であったと思います。

江戸時代は白丁姿で、神輿をもんだりしないんです。静々と運ぶだけの神輿担ぎだったそうです。それが明治以降になって、神田祭でもみ担ぎが行われるようになってくる。だいたい明治四十年ぐらいの神田祭の神輿では人も乗っていたんです。

じゃ、現在はどうか。先ほどもちよつと言いましたけれども、三基の鳳輦神輿という言い方をしました。鳳輦とは何だろうというと、神輿には変わりないのですが、神社のほうでは鳳輦と神輿は形で分けております。まず鳳輦ですけれども、鳳輦はそもそも天皇、貴人がお乗りになるお乗り物だったといわれております。真四角なんです。そして人が乗れるぐらいの空洞ができております。この形をもって鳳輦という呼び方をしております。では神輿はというと、胴の部分がキュツとしておりまして、神様が乗る専用につくられたものをわれわれは神輿と呼んで、鳳輦、神輿と使い分けております。というわけで、江戸時代は神輿二基

だったんですけれども、現在は鳳輦と神輿三基、江戸時代とちよつと違うかたちをとっております。

この鳳輦なんですけれども、実は大正時代に宮神輿二基を鳳輦に変えたんです。これは京都の文化の影響があったといわれております。ただ、これは関東大震災直前に変えたもので、一回しか巡行しなかったのですが、それを現在のお祭りに活用したんです。ということは、大正時代のお祭りの文化伝統を現在に生かして、神田祭のオオナムチノミコトがお乗りになる一の宮鳳輦は創造されたということが言えると思います。ちなみに現在、國學院の大学生に運んでいたであります。先ほども言ったとおり、神輿ですけれども、氏子が担いだことは、神田祭の宮神輿ではないんです。江戸時代は南伝馬町と大伝馬町、明治時代も馬組という組が手配した人足に担がれています。現在も國學院大學の神道文化学部のこれから神職になっていく人たちに、お祭りを体験してもらおうというのも含めまして、務めてもらっております。

今度は山車行列に関してご覧いただきたいと思えます。先ほど福原先生からお話がありましたけれども、氏子が出していたのは山車になります。神田祭の山車は三十六番、だいたい四十五、六本出ておりました。この四十五、六本、三十六番というのは、必ず出さなければいけなかった。そ

これはなぜかという、天下祭だったからです。江戸幕府公式の年中行事だったので、どんなことがあっても出さなければいけなかったんです。

現在は諫鼓鶏と獅子頭の二基の山車が人形山車として出されております。太鼓山車はいろいろな町会で持つておりますけれども、このように人形が乗った山車は二基しかありません。唯一羽衣人形の山車のみ引き回されて、神社に宮入をいたします。魚河岸の龍神山車は飾り置きをするのみです。

山車がなくなった代わりに何ができていくかという、先ほど言った二百十六に近い数の町神輿です。実はこの町神輿もいろいろ調べてみますと、大正時代ぐらいからつくられていきます。いちばん最初は明治四十二年の富岡八幡宮のお祭りで町の神輿がいつぱいつくられて巡行したという記録が新聞に出ていますけれども、神田明神では、町神輿は大正時代にたくさんつくられていくと記録で見られます。そして現在は、どんどんつくられて、多くの町神輿が宮入をしております。

神輿というと、重さがなんとなく注目されますけれども、昔の新聞を見ますと、昔は神輿をいかに軽くしようかと考えていたみたいです。それと、神輿は必ず年々古くなつて、もみ担ぎをすればそれなりに壊れていきます。それで

修復をします。でも、修復し切れなくなると、新調するんです。ですから、神輿というのは歴史とか古さも大事なのかもしれません。神輿が乗りである以上は新しくきれいであるというのが最も良かったのです。

最後に附祭。実は江戸の祭礼は山車のお祭りによくいわれますが、附祭というこれからお話しさせていただくものが、江戸のお祭りではいちばん人気がありました。では、附祭とは何だろうかという、万度や練物それから造物、さらに踊台や底拔屋台といった様々な要素で構成される行列です。

最初は附祭の一連の行列というのは、後ろにつく山車にかかわるものを出していたみたいです。

踊台と底拔屋台は前のほうで女の子たちが後ろの演奏者に合わせて踊りを踊っています。附祭には十代ぐらいの女の子がいつぱい参加しています。また演奏する人たちなのですが、歌舞伎とかに演奏者として出ている、いわゆるプロの芸人がお祭りに参加しているんですね。だからプロと素人がコラボしている、それが附祭でした。

巢鴨とか浅草など氏子外からも女の子たちは参加しました。また附祭は毎回違う題材で出されていたので、非常に人気があったといわれております。

さらに御雇祭というのがあり、太神楽やこま廻しが出さ

れました。江戸時代は熱田派の太神樂が行列に加わりました。現在は太神樂曲芸協会という人々がお祭りに参加していただいております。

こま廻しは浅草の奥山で齒磨粉を売るのにこま廻しを見せていた松井源水が神田祭に参加していた。太神樂もこま廻しも江戸幕府がお金を出して参加させていました。

そのほか、品替御雇祭といまして、太神樂、こま廻しの代わりに附祭のような造物をつくって出した行列もありました。これは大奥女中が、こま廻しに替えて所望したもので、いろいろ町の人たちが工夫を凝らして出したそうです。これは氏子外から出ていた行列です。

かつて御雇祭で出された「花咲かじいさん」が、文化資源学会、また福原敏男先生が代表を務めます都市と祭礼研究会により平成二十五年の神田祭で復活しました。

そのほか現代の神田祭では、『神田明神祭礼図巻』にかかれた大鯰と要石という曳き物もバルーンで復活させました。どれぐらい大きいかというと、だいたい九メートルぐらいの大きさがあります。非常に大きいものですね。そのほかにもいろいろなるものを復活させております。また神田明神のゆるキャラの「江戸っ子みこしー」も附祭で出しました。出しているんです。

さらに相馬野馬追騎武者行列。福島県の南相馬市から参

加の神田明神のご祭神・平将門公の軍事訓練から来た行列です。また、東京芸大の一年生がつくった曳き物や静岡県三熊野神社の祢里も出されました。この祢里は江戸時代の神田祭の山車に近い形体であったところから、今回特別参加していただいたりしました。

また、絵巻に描かれた浦島太郎の山車を現代風にアニメチックに附祭として復活させました。

江戸・東京の祭礼という伝統文化は歴史の中で変容し続けるということが言えると思います。先ほど山路先生のご講演でもおっしゃっていましたが、やはり時代によって変わるものです。祭礼という伝統は、その時代により前の伝統を文化資源として、新たな形に再創造されていくのです。

祭礼と芸能

講師

山路 興 造 (民俗芸能学会前代表理事)

パネリスト

福原 敏 男 (武威大学人文学部教授)

岸川 雅 範 (神田神社権禰宣)

コメンテーター

小島 美 子 (国立歴史民俗博物館名誉教授)

高山 茂 (成城大学大学院講師)

司会

茂木 栄 (國學院大學神道文化学部教授)

茂木(司会) 皆さん、こんにちは。これからここに登壇していただいている先生方によるコメントと討議ということになります。

最初に小島美子先生。著名な先生でいらつしやいますので、皆さん、お顔もご存じかと思ひます。よくNHKなどのスペシャル番組で日本の音楽が取り上げられるときは必

ず出演されておりますし、民謡とか伝統音楽についての造詣は日本一と自他ともに認めていらつしやると思ひます。プロフィールについては皆さんにお配りしております。いまの肩書としては国立歴史民俗博物館名誉教授ということだけお伝えしておきます。小島美子先生は伝統音楽、それから民俗芸能の権威でいらつしやいますので、きょうの

「祭礼と芸能」というテーマにつきましては、コメントと同時に芸能の面をすこし強調してお話ししていただければと考えております。先生、よろしくお願いいたします。

小島 あんまり過分な紹介をいただいたので、いま帰りたくなってしまったところなんです。日本の音楽史を専攻しておりますので、神道についてはほとんど素人同然でございますから、祭り、祭礼ということをどういうふうに考えるかということについては、私は非常に素人的な意見を申し上げるようになると思います。それから、芸能の中でも比較的私が勉強しているのは、勉強というほどではありませんけれども、神楽を多く拝見しているので、どうしても祭礼というと神楽というふうに、しぜんにそういう発想になってしまうので、きょうも神楽を中心にしたようなシンポジウムにどういうふうに参加したらいいのかよくわからなくて、趣旨というところをよく拝見しましたら、祭礼と芸能との関係性を明らかにすることが非常に重要なテーマになっていることがわかったので、これまでのお三人の先生方のお話と直接関係がなくなってしまうのですが、私なりに考えたことを申し上げてみたいと思います。

まず一人の人が何か特別に神様にお願いをするときは、たとえばイタコさんとか沖縄や奄美のユタの方とかにお願いを祈りになると思います。そうではなくて、集落とか村とか団体とか、そういうある程度の集まりの人たちが共同のお願いをします。そして祈る。そういうのが祭りではないかなと私は考えました。とくに強力にお願いをすることになりますと、神様のご意思を伺うということになるわけで、それには神が必要になるだろうと単純に考えました。そうすると、まず身を清めて潔斎をして神がかりする。でも、神がかりは、イタコとかユタの場合は体を動かすことは非常に少なく、むしろ歌だけで神がかりしていきます。あれが本当の神がかりかどうかということについてはまたご意見もあろうかと思いますが。

神楽の託宣の場合のように本当に神がかりする、目に見えて明らかに神がかりしているとわかるような、そういう神がかりをするためには、神がかりする本人がどうしても歌うなり舞うなり、何かパフォーマンスが必要であろう。そしてまた周りの人たちもそういう雰囲気をもたないと、みんながシラツとした雰囲気の中で神がかりというのはできないことで、皆さんもそう乗せていかなければいけない。そうすると、なんらかのかたちで歌うなり音楽をするなりお囃子をするなり舞うなり、そういうことが必要で

はないか。そのかたちができたのが、おそらくいちばん最初のかたちは巫女舞だったと思います。

皆さんのお手元に資料を差し上げてあると思いますが、これは『年中行事絵巻』の中の一部分で、コピーのちょうど真ん中の大事な部分が白く見やすくなっております。この部分をご覧になっていただくと、明らかに鼓などでお囃子をしておりまして、舞い手は小松茂美さんの解説では、若い巫女と書いてありますが、右手に鈴を持って舞っています。この裾のまくれ方などを見ますと、かなり激しく舞っている、回っているというふうに想像できます。決して静かな舞いというふうには思えない。これが神がかりしていくためには一つの強い条件だったろうと思います。こういうふうにして潔斎した人が神がかりして、神様に降りてきていただく。そこで神様の意思を聴くということになると思います。

二枚目の紙を見ていただきますと、あまり知られてないと思ったのでわざわざ文字のコピーを入れましたが、フロイスの『日本史』の中の一節です。これはアルメイダという人が報告したところです。アルメイダという人は少々誇張があるという説もあるので、このまま信用していいかどうか、多少問題がありますけれども、春日大社の巫女神楽についての報告です。ご覧いただくとおわかりになると

思いますけれども、彼女たちの夫である社人たちがお囃子をして、巫女が舞う。それから、個人的にいろいろなお願い事に対して答える。「彼女は地獄の叫喚と絶え間ない咆哮のように思われるほどの激烈さをもって」と書いてありますから、相当激しく舞ったし、おそらくお囃子も激しかったのだらうと思います。ここには楽器名としては太鼓しか書いてないのですが、おそらく銅鉞子のたぐいも使ったのではないかと私は想像しております。それから、熱情的に急速に舞って、ついに失神したように倒れて神の霊がのり移り、それから起き上がって頼みに答えます。

これは実は韓国のムーダンと非常に似ている。韓国のムーダンの研究者にこの話をしましたところ、そっくりじゃないかと言われました。ここではこれ以上ふれませんが、私はおそらく日本の平安期の巫女のオリジンはおそらくムーダンのオリジンとつながる、同じであろうと想像しております。この場合には個人的なお願いですけれども、祭りというかたちでは集団のお願いをこういうかたちでやったのだらうと思います。

この『年中行事絵巻』の解説の小松さんは「巫女の里神楽」と書いておられるのですが、このころの里神楽をこういう意味で使っているのか、こういう言葉があったのか、私は疑問には思っています。おそらくこれは巫女舞と書く

べきだっただろうと思いますが、巫女神楽でも巫女舞でも同じだという説もありますので、巫女神楽ならいいかなという気はしています。

こうやって神様のご意思が伺えれば、そのあとは神遊びということになると思います。中世になりますと、おそらく里神楽が成立している。里神楽はもともと巫女舞から始まって、修験道が加わって男性中心のかたちになり、さらにのちになると神道の影響が加わったりする。その神楽が成立してきますと、神楽の採物の舞が行われるようになると思います。その採物には莫塵・御幣・鈴扇・櫛・剣などがあり、そういったものを持って舞うことによつて、そのものが本来持っている神霊の力を發揮させるようにするということから始まったというふうに私は考えるわけです。本田安次先生はいつも舞うことによつて清められるとおっしゃったのですが、それはやっぱり採物の舞の場合に当てはまると考えてます。

たとえば資料の二枚目に書きましたけれども、出雲神楽では採物は七種類ありますけれども、七座の神事と言っています。あくまでもこれは神事としての舞いと考えたほうがいいと思います。その後は面を着けた芸能的な舞に続いていきますけれども、これは順序はあちこち、その場によつても変わると思います。しかしこの七種類の採物の舞

は出雲神楽では多く行われていると思います。これは勝部月子さんという方のご本からたまにまとりましたけれども、ほかにもたくさんの方が挙げられると思います。

皆さんご存じだと思いますが、神楽はカミクラの意だといわれているわけですが、神様が降りられる場所、それが莫塵である。その莫塵を清めることになるわけですから、場所も清め、舞台も清めます。そして、神様が降りてこられます。そのあと神遊びということになるわけです。宮中の御神楽などでは歌が中心です。そして人長の舞いがついていきますけれども、これは別に舞いがなくなつたわけではなくて、歌が中心だったと私は考えています。その後、民間の神楽では劇的なものを加えるとか、いろいろ歴史的なものを加えます。いまはひどいことになってますけれども石見の神楽では八頭のオロチが出てきてスモークをたいたり大変です(笑)。それはともかくとして、そうやって神遊びをして神送りをするというかたちが、神楽では普通だと思います。

こういうのを見ますと、もともと祭りというものの中に芸能的な方向に向かっていくようなエネルギーというか、そういうものを祭りは内包しているんじゃないか。神事の中に実は歌ったり舞ったりするような方向に向かわざるをえない力があるんじゃないかなというふうにも考えはじめ

ました。

そういうふうにして一応かたちはできていくわけですが、それでも、しだいに都市化したところでは、見せるための動きが大きくなってきて風流が始まると思います。きょうお二人がお話くださったような山・鉾・屋台など、そういうものの中にはゆたかな都市ならではの見えるための様々な工夫が発展していったんだろうと思います。先ほど氏は御神輿を担がないとおっしゃったですね。それはとてもいい例だと思えますけれども、都市では氏はほとんどなにも芸能には関係していない。周辺の地方の人たちにお願いするというのが多い。

さつきも拝見していて思ったんですけども、斎藤月岑の日記を見ますと、町内会の主だった人たちが集まって何をしようという相談をして、たとえばテーマを花咲か爺という相談をする。じゃ、それを誰に頼むか。そのときに先ほど挙げられました富本豊前太夫とか清元延寿太夫とかその他、いまでいえば人間国宝のようなすごい演奏家を頼んでいらつしゃるんですね。ですから、神田明神さんの氏子の方はすごいお持ちだったんだなと思ってびっくりしました。それから、女の子たちもほとんどが日本舞踊を習っている子たちが選ばれて出ているんですね。ですから、ほとんどプロの人たちにそれを託すようなかたちになって

いく。しかも、これは私の想像なんですけれども、そういう芸能をやる人たちがプロデュースしていくような人もいたんじゃないか。そうしないとできないので。つまり、それほど芸能化が激しくなってくるというか、風流化が激しくなってくる。そういうふうになると、祭りの本当の神事は神事として行われているし、御神輿には神霊が移されている。ですけれども、そういう意味をあんまりみんな意識しなくなっているというか、そんな感じがします。

それがどんどん変わっていったって、先ほどもゆるキャラが御神輿みたいになっていましたけれども、そのもつと極端な例を一つ。資料に書いておいたのですが、鷲宮神社の土師祭はじさいの例なんです、本当の御神輿は右のほうにありまして、左側のほうにあるのはアニメのスターを描いたものらしいんですけども、それを御神輿につくって、それをファンたちが担ぐ。鷲宮神社の神楽は本来、いちばん最初に関東地方で始まったといわれているところなので。私どもが四十数年前に調査に行ったときには、もう周辺には誰もいない土地の人もない、私ども調査者だけがいているという状態だったのに、いまはこの写真でもおわかりのようにものすごい人ですね。高山さんがいつかいらつしゃったら、近寄れなかったとおっしゃっていた。

高山 はい。入れなかった。

小島 それほどの人になって、しまいにはこういうふうな新しい御神輿も出てきました。ここにはもちろん神霊は関係ないということになります。先ほどの岸川先生のお話だと、右側の御神輿にも神霊はいらっしゃらないんですか。

岸川 神霊は宿っていないと聞いています。

小島 ということになると、よけい意味がわからなくなってくるのですが、こんなふうにして、芸能が風流化してくるに連れて、祭り本来のものは、かなり希薄になってきているんじゃないか。それでも、先ほど山路さんが言われたように、芸能としての力というのはやっぱりあるので、それは東日本大震災の時の被災者を見てとても痛感しております。芸能というのは、村の人たちの絆を深める非常に重要なチャンスなんだと。祭りというのが、神様との関係だけじゃなくて、もう一つ意味が加わってきているのかなと。そんな感じもするようになりました。

茂木 ありがとうございます。小島先生は専門的なお立場から芸能の原点ともいうべき巫女舞のお話をされました。巫女舞、つまり神がかりの舞いでありますけれども、そこから里神楽というものになり、そして採物舞。ご存じのよに剣や鉾やササラを持って鈴を右手に持ち舞いを舞うというかたちになって、それが清めの意味だということです。山・鉾・屋台で見られるかたち、山の上に鉾を立てたり、

人形を乗せたり、ある意味柱になるものを乗せて、これが神霊の依代だと。祇園祭というのは山の神を下ろすのだという感じで私は考えていたのですが、山路先生がおっしゃるには、そうではなくて、町の中にごろごろ転がっている疫神を集めて、それを山路先生はごみ集めだという言い方をされましたけれども、そういうふうには神の依代として、疫神の依代として屋台・鉾・山が機能しているということ

です。
要するに、基本的な祭礼における山車・屋台の役割というのが、神様を寄せ集める依代の役割をしている。これは芸能を行う人にとつて全く同じようにやっぱり神の依代として、そこで様々なかたちの芸能に分化して、神の言葉述べたり、いろいろな託宣をもらったりということかたちになっていくんだと。それが現在の大震災のようなときには大きな力を発揮するし、それが希薄になると、アニメに浸食されてしまうような現象も起こってくるんだというお話のように受け止めました。芸能も祭礼における大規模な山車・屋台の情熱というものも、根は同じだということふうにおっしゃられたと思います。

続きまして、高山茂先生にお話をいただきしたいと思います。高山先生は、ここでは成城大学大学院講師というふう

本大学の国際関係学部教授でいらっしやいまして、ここに書いてありませんけれども、いま民俗芸能学会の代表理事をされております。高山先生は芸能の専門家で、とくに神楽については非常に造詣の深い先生です。高山先生、よろしくお願いいたします。

高山 高山でございます。さつき小島先生がおっしゃっていたこのシンポジウムの趣旨が祭礼と芸能の関係について考える、ということ聞いた時に、祭りとは芸能の関係というのにはななをテーマに話したらいいのか、だいぶ迷ったんです。祭りの主体が民俗芸能にあるという祭りというのは、枚挙にいとまがないわけです。そういったところではほとんど祭りと民俗芸能は同義で使われております。たとえば民俗芸能の特色的な要素といえますか、民俗芸能はどのような特色があるのかということを考えてみますと、非日常性、ハレの日に行うとか、あるいは周期性をもっている。一年に一回行うとか一定のサイクルで回ってくる。あるいは信仰性をもっている。周期的に回ってくる中で日にちが一定していて、同じ日にやる。それから、祭りをやる人たちも基本的には民俗芸能をやる人と同じ集落とか地域の人たち。伝承者にも一定性というのがある。それから、場所の一定性もありますよね。いつも同じ場所でやる。こういう要素を考えてみますと、基本的に民俗芸能も祭りも全く

重なるように思うわけです。

祭礼と芸能に戻りまして、祭礼と芸能の関係性というので、きょうは民俗芸能というよりも、舞台芸能、古典演劇であります能の中で最も神聖であり、最も祭事性が強いといわれている「翁」というのがあります。千歳・翁・三番叟という式三番というかたちで行います。その「翁」を例に、「翁」の中にどのように祭りが取り込まれているかということを取り上げることになりました。資料がお手元にいっていると思います。裏表の一枚物です。ここに「能の『翁』（式三番）―まつりから芸能へ―」と書きました。私はここで「まつり」と平仮名で書きました。これは説明すると長くなるのですが、ある思いで使っております。現在、祭りといえますと、お祭りだ、楽しいとか賑やかとか、そういう観点でとらえられていることも多いと思いますが、私がここでいう「まつり」は神祭りなんです。神事と言ってもよろしいです。そういう思いで取り上げました。

この資料をご覧になると、最初に千歳、これは露払いの舞であります。それから翁、それから三番叟という順序で舞を舞っていく。この三番形式の舞を現在の能では「翁」と呼んでいるわけです。この能を上演する形式を見えますと、下に四角で囲ったような順序で展開して行きます。まず最初に別火ということをそれぞれの演者がやるわけ

です。別火、これは物忌みであります。お祭りをする人たちがお祭りの前に一定期間物忌みするように、能の演者たちもするということなんです。昭和十五年に金剛巖さんという方が『能と能面』という本を書かれています、これを見ますと、一七日、七日間。昭和十五年で七日間物忌みをする。もつと古くは三七日間、二十一日間やったということが書かれています。現在はずいぶん簡略化されているようです。人によっても、流派によってもかなり違いは起きているようですが、ともかく別火ということをまずやらなければいけない。祭りにとって、神を迎えるにあたってたいへん大事なことであるわけです。これを個々が行うということがあります。

それから「翁」を上演する当日。「翁」というのは基本的に正月以外やららないんです。一年の最初の能は「翁」から始まるんです。そういう儀式的な能ですが、「翁飾り」の祭事を行います。これは「鏡の間」で行う。鏡の間というのは、能のシテ方がそこで能面をつけるたいへんに神聖な場所であります。私もちょっと能の世界で事務方としてお手伝いしていたことがあるのですが、男性でも鏡の間には足を踏み入れがたいような雰囲気をもった空間であります。その鏡の間に白木の祭壇を設けて、翁面・三番叟面のほか神酒・塩・洗米といったもの、一般のお祭りでもよく

使いますが、そういうものを飾って、演者一同、「翁」のシテから順次、盃事をする。これは観客席から見えません。鏡の間で行う儀式なものですから。

それも終わりますと、揚幕という幕を上げて、演者一同登場するわけですが、そこで切り火を打って、清めてから橋掛りを渡って舞台に入ってくるわけです。面箱、その中に翁面、三番叟面が入っているわけですが、それを持った面箱持を先頭に行列をつくりまして、橋掛りから一列になって舞台に入ってきます。これを見ていきますと、祭りをする人たちが祭りの庭に行列をつくって入ってくる、渡ってくるというふうなことを感じます。いま二百五十ぐらいの能が存在するのですが、それらのほかの能と違って、全員が正装で入ってきます。「翁」には普通の能と違うところが何点かあるのですが、そういうふうにより全員が橋掛りから入ってくるということは普通の能ではありえないですね。たとえば地謡といって合唱する人たちは切戸口といって、小さな口から舞台に向かって右側から入ってくるというのが通常なんです。この「翁」に限っては全員が一列になって入ってくる。そういう点が非常に祭礼の行列とすることを強く感じるところです。

入ってきますと、まず翁太夫が舞台の前面で観客席に向かって拝礼をいたします。それから面箱の蓋をあげまして、

その上に翁面を置いて、その翁面を前にして「とうとうたらりたらりら、たらりあがりららりとう」という謡の文句を謡う。したがって、翁になる人はまだ仮面をつけていないわけです。通常の能ですと、最初から仮面をつけて登場するのですが、仮面をつけないで登場する。これは一体何なのか、ということからでしょうか、「翁」というのは「能にして能にあらず」という言葉も聞かれるところでもあります。

そこで資料の裏側をご覧になっていただきたいのですが、これが「翁」の謡の文句、シテ方のほうの謡の文句であります。私が黒くカギ括弧でくくった部分、これが翁面を前にして翁太夫が地謡と掛け合いで謡う部分です。この掛け合いというのも、神歌のたいへん古い形式だと思えます。三信遠の民俗芸能を見ましても、神歌を掛け合いで歌っていくという形式が一般的であります。このカギ括弧でくくった部分「とうとうたらりたらりら、たらりあがりららりとう」うんぬんとありまして、その次に「我等も千秋さむらはう鶴と亀との齡にて幸ひ心にまかせたり」、この部分を四句神歌といえます。七五七七五五五という四句形式で並んでいる神歌であります。そしてまた「とうとうたらりたらりら」。つまり、この形式は「とうとうたらり」と「とうとうたらり」のあいだに四句神歌が挿入されてい

る。

それではこの「とうとうたらりたらりら、たらりあがりららりとう」というのは一体何なのかと皆さんは思いになられるかと思いますが、意味不明ですよ。そのうちの四句神歌はまだわかりません。「所千代までおはしませ我等も千秋さむらはう」、これは意味がわかる。「とうとうたらりたらりら」というのは、結論的に申しますと、「とうとう」というのは太鼓、「たらりたらりら」というのは笛、「ちりや」は箏の音、つまりこれは雅楽の唱歌であると思っっているんです。唱歌というのは楽器の譜を口で唱えること。そうしますと、「我等も千秋さむらはう」うんぬんという四句神歌を「とうとうたらり」という音楽で囃しているということになります。

この時に翁太夫は、面をつけないで、翁面を前にして謡うということですが、ここで二分三十秒ぐらい、その部分だけ映像をご覧になっていただきたいと思えます。

(ビデオ上映)

左側にいるのが三番叟になる人ですね。右にいるのが千歳で露払いの舞を舞う人。翁をつとめるのは、ちよつと古い映像でして、先代の観世宗家、観世元正(左近)氏。いま清和さんという方が宗家ですが、そのお父さんです。

その部分の謡が終わりますと、千歳が立ち上がって、

露払いの舞を舞います。その間に翁太夫は翁面をつけまして、このあと翁の登場ということになるわけです。これはその翁・三番叟が登場する前の露払いの舞です。

一方、民俗芸能にも翁舞というのは各地にあるわけです。古い民俗芸能の翁舞というのを見ますと、最初から仮面をつけて出てきます。それはどうしてかといえますと、民俗芸能では前のほうで神降ろしの神事を済ませていくわけです。ですから、最初から面をつけている。そうすると、いまの翁面を前に「とうとうたらり」と謡う部分というのは何をしているかというのと、神降ろしの神事をしている。どこに神を降ろすかというのと、仮面に降ろすんです。巫女のように体に降ろすのではなくて、仮面に降ろす。その仮面をつけることによって、今度は翁太夫から神の位、神格を帯びた一種の神としてそこに示現するという祭りの形式で、この翁舞が取り入れて構成したもので、古い翁・三番叟の舞を再構成して舞台でできるようにしたものが、こういうかたちかなと思っております。

神事は本来は神社の拝殿などで関係者が行うもので、一般の人が見るものではないですね。その神事の一部を観客の前に、見えるところに出して、芸能の部分と一体化したのが、この「翁」という形式ではないか。つまり、まつり（神祭り）から芸能への移行を観客に見える形で示している

と考えられます。こういうふうには祭りの構造を取り入れている。ということ、これを祭りと言能との関係性というところで今回取り上げたことであります。時間でするので、とりあえずここまでで終わらせていただきます。

茂木 高山先生、ありがとうございます。翁舞の中に準備から「翁」を演じるまでに祭りの構造をもっているというお話で、なぜそうかという答えまで最後におっしゃってくださいましたけれども、「翁」の芸能というのは、本来、神社等の奥深くで行う神事を、いわゆる芸能とつなげるためには人に見えるところに出していくというプロセスがあつて、「翁」の中に物忌みから始まる祭りの構造が残っているというお話でよろしいでしょうか。そのようにお聞きしました。

これで基調講演、そして発題、それからコメントとかたちでそれぞれのご専門のお立場からお話をいただきました。皆さんもお気づきのように、専門家の中でも祭礼という言葉の定義が若干ずれる。祭りということに関して若干ずれている。その混乱というのはどうしても出てきますね。

お話を聞いていて、祭礼をどう理解したらいいかということについて、これは本当に一般的なことで浅薄な考え方ですけれども、柳田國男のいう祭礼は、祭りから祭礼へと

いう時代的な変遷があった。祭りとはいうのは、もちろん神事を中心とした神祭りのことです。それが、時代が変化していくと、祭りにかわからない見物人たちが多くなってくる。見物人に対して見せる祭りというのがだんだん発達してくる。見物人を意識したかたちで出てくるものが祭礼だ。ですから、祭礼というのは祭りにかわからない、見物人を意識して見せる祭りになっている。これが祭礼だというふうに柳田は説明している。その立場をとらないというか、あまり柳田に依拠しない考え方が当然あっていいわけでありませうけれども、そういう祭りと祭礼との関係、それから祭りと芸能の関係というのが、いまこの話の中では若干錯綜した感じがありますが、それぞれの知見のなかで祭りや芸能、祭礼についてのお話をいただいたわけです。

その中でポイントになるかなと思うのは、全体の空間的な問題と時間的な問題があるかと思えます。空間的には、たとえば基調講演の山路先生がおっしゃるように、これもまた斬新なのですが、祭礼にとって、そして芸能にとつては、神社自体よりも、そこから行列を組んで下りていく行った先の御旅所。だいたい神社というのは、ご承知のように山の端にありますよね。町があって、町をちよつと外れて山に登っていきそうなところにあるわけです。そこから下りてきて、町中を通ったところに御旅所がつくられて

いる。御旅所というのは、皆さんご承知だと思いますけれども、行列が行って、休むところですよ。神様が一時安置される場所。ここが芸能の場になるんだと。そのほうが実は本社の神社よりも重要だという、かなり衝撃的なご意見が一つありました。

それから、岸川さんの空間的な考え方でいくと、江戸の天下祭りとしては江戸城に入っていく。江戸城と町との関係が非常に空間的には重要なかなという印象を受けました。江戸城に入っていくために山車の形とか祭りの規模が影響を受けるものなんでしょうか。山車というのは、福原先生のお話ですと、非常に近代的な言葉だ。近代に入ってから山車という名称が普及したとおっしゃられたわけです。しかし、神田祭では山車は江戸後期に山車というふうにな一般的に使われているというふうには岸川先生のお話では出てくるように感じます。

いまの空間的な問題でこの二つですね。山路先生は御旅所が重要だという見解をもうちよつと説明していただいて、福原先生と岸川先生には山車ということについてのあり方というか、江戸城との関係でもなにか影響を受けることがあるのかどうかということをお話しただきたいと思えます。

山路 一元的にそう言われてしまうと、非常に答えにく

くなるんですけれども、基本的に古い神社、たとえば先ほどお話をしたような那智の大滝とか？賀茂の山とか、そういう所から神様を神社のほうに遷してくる。そこで祭事をやり、なおかつそこで芸能をやる。一般的な村の氏神さまなんていうのは、そんな古いわけじゃないですしね。そこからへんで自然というもの、それから山というもの、山というのは基本的に自分たちの先祖がいらっしやる場所ですね。そこから神様を降ろしてくる。

実は質問の中に一つあったのが、自分たちは神社で礼拝しているけれども、その神社の中には神様がいないと山路さんは言うけど、本当なのかと。基本的には、先ほど言ったように神社で礼拝している。それが結局はもとのところの神様の居場所までつながっている。その入口に当たるわけだから、とりあえずそれが礼拝所としては神社でいいわけ、神社そのものの四角い箱の中に神様が入っているわけではない。それから、柱のある神社では神様はそこに常住していると言ったわけです。二通り違いがあるんだということです。

いま御旅所の話が出ましたけれども、こんにちの神社で御旅所というのを一般化してしまうと非常に説明しにくいのですが、先ほど言ったようなほくの知っている範囲でたくさんあるんですが、そういうもともと磐座だったり滝

だったり山であったり、大神神社でもいいですが、そういうところ自体に神様がいらっしやって、それを祭祀の時だけお迎えする。たとえば沖繩の場合は御獄（うたき）という山、岳があって、そこからウガンジヨ（拝所）という、沖繩の場合には実際は建物はないんですけれども、祭祀をやる別の場所に神様を迎えてくる。そしてまたお帰しする。結局、神迎えということをやりますから。

神様をどこから迎えるかというと、それはいろいろとあります。たとえば自分たちの先祖神が、中国地方なんかの例で多いんですけれども、山から里に変わる。里というか、田畑のあるところが変わる。その境の太木のところ、古いお墓があったりして、その太木に自分たちの先祖がいるんだというので、そのところに蛇綱を巻き付けて、その蛇綱に先祖神を勧請して、それで神社の、だいたい場合は拝殿なのですが、本来は、神社の拝殿とは別に神殿（こうど）を建ててお迎えする。

芸能はどこで行われているかというと、神様をお迎えしたその場所。それがすべてが御旅所だというわけではないんです。そのところでやるんだという話をしたわけ、一元論的に御旅所がすべてそうだというふうには言われてしまふと困ります。たとえば熊野にしても何にしても、熊野川自体が御神体であったり、滝自体が御神体であったり

する。それを神社という施設を別のところに設けて、そのところにお迎えして、またお帰しする。そういうところはけっこうたくさんある。それは古いかたちだろうと言ったわけです。

福原 私は、町場というか城下町というか、そういうところのお祭りを描いた絵画を分析するのを専門にしています。絵は屏風も多いんですけども、日本の場合、祭礼の行列を描く巻物、祭礼絵巻がたくさんある。それを見てみると、描写場所がどこだという同定はなかなか難しいんですけど、私がいままで三十年ぐらい見てきた祭礼絵巻の中で、御旅所への往復の往を神幸祭というならば、帰ってくることを、現在の神社祭式でも還幸祭と言うと思うんですが、おそらく還幸祭が八〇%以上です。山路先生がおっしゃるとおり、帰りこそ重要なんです。御旅所で何かがある。福島県の浜通りの百三十ぐらいの(国指定が二つもある)素晴らしい浜_り下_り祭りは、浜に神様が毎年、毎回みあれする。来臨する。そこで縁起や神話にあるような始原の儀礼があつて、また山側にある麓にあるところに帰られる。つまり、御旅所が浜にあるのか、旧家にあるのか、森にあるのか。御旅所こそ祭りの注目すべきポイントであると思えます。

あと、前近代の山車は基本的に部分名称。一本柱の傘鉾

万度、吹き貫きとか、その上の部分名称を出すと表記される。それは江戸の場合も、江戸末期まではメジャーだったんじゃないかなと思うんですが、岸川先生、いかがでしょうか。

岸川 私も福原先生と全く考えは同じです。ただ、「出し」と書いて「だし」という表現はあつても、山に車と書いた「山車」というのは新しい表現だと思えます。

あと、江戸幕府との関係、江戸城内曲輪内に入ること、山車、附祭の大きさとか変化があつたのではないかと。たしかにあつたと思います。祭礼番付というのがあります。それはもともとこの山車に何人、附祭に何人というのを幕府に申請するための書類から、絵のついたものがつくられていくという経緯があります。享保の改革、寛政の改革、天保の改革で、附祭の数とか規模が実際に規制されています。江戸幕府との関係から、そういった意味では規制されていると思います。

あと、山車なんですけれども、もともと一本の鉾というのが原型なのではないかと思っております。江戸時代の山王祭の資料を見ますと一本の棒にちっちゃい町の名前とちっちゃい人形のついたものを一人の人が持つてそれを山車にしているような絵があります。また国会図書館に『御祭礼諸記』という亀戸天満宮の元禄期ぐらいからのお祭り

の行列の変遷を書いている資料があり、それを見ると、元禄十五年から宝暦十年までの変遷を見てみると、享保十九年のところに「吹流壺本 車二乗ス 車引二人」と出てくるんです。ということは、元禄期ぐらいはおそらく人が持っているか、何人かで担いでいたものが山車であって、軽かったのではないかと思えます。それが大型化していつて、車をつけて、幕末ぐらいになると江戸型といわれる豪華な山車がつくられていくという経緯があるんじゃないかと思えます。あと、江戸城の城門を通る際に、山車は最大八メートルぐらいありましたので、下に低くなるようなからくりもつくられている記録はあります。

茂木 ありがとうございます。いただいたレジュメの中の江戸後期の神田祭ということで、スライドでも見せていただきましたが、祭礼絵巻のこの山車ですけれども、これは車ありますか、車なしですか。

岸川 江戸後期には山車に車がついていました。

茂木 三十六番四十五本前後。「本」という言い方をされていますので、本ということは車がないかなと思っただけですが。

岸川 その名残で一本、二本という数え方を通常していません。他に一輛、二輛とも数えませんが。

茂木 それから、ちよつと山車について問題にしたいと

思います。福原先生も講演のなかで取り上げてくださいましたけれども、國學院大學で山車という曳き物についての調査をいたしました。あれはアンケートをとりましたけれども、むしろアンケートというよりも、「平成祭データ」という神社本庁がかつて行った全国の祭り調査、これは神職さんたち二千名の調査員を動員して、延べ四年間かけてやったんです。たとえば山車について、鉦とか曳き物については一基、二基という数え方ではなくて、山車を出す祭りがいくつあるかという計算の仕方なんです。

その結果ですけれども、山車というのは全国的に山車があるわけではなくて、山車の名称で引つ張るものは圧倒的に関東地方のもですね。それから、不思議なことに愛知県、静岡県が突出して多いんです。いちばん多いのは神奈川県、二番目が東京都、三番目が愛知県、四番目が静岡県ということになっておりまして、これはどう考えても徳川さんのお膝元なんですね。それで、先ほど岸川さんに尋ねたのは江戸城との関係がこの天下祭りたちにあるのかと。なにかさういうとつかかりというか、ヒントになるかなと思ってお聞きしたんです。とにかく、山車は東日本のもんです。間違いなく。

それに対抗するものは何かというと、だんじりですね。だんじりは圧倒的に大阪府、それから兵庫、徳島、瀬戸内

海を囲んでいる地域が数字的には非常に多いということになっていまして、東と西を特徴づけているのではないかと。

あとは、山・鉾と出ていますが、山はいちばん多いのが福岡ですね。それから、どういうわけか石川県も多い。鉾については、京都がダントツで多くて、福岡県がそれに次いでいる。なぜ福岡が山・鉾に関してたくさん祭りが出すのかということはこれからの課題ですけれども、山車についてはやっぱり東日本だという結果が出たということをご報告しておきたいと思います。

小島先生。芸能の立場からお話いただきましたけれども、芸能を披露する神様が移動したその先、もしくは神様が見られるその場所、由緒的にも重要な場所で芸能が行われ、そのあとの還御のほうが非常に重要だというご指摘を福原先生がされましたが、このことについてはどうでしょう。芸能の力というのが祭り全体を活性化するとか、生命力の問題で何か……。

小島 祭礼と芸能、非常に結びつきの強いものだし、これは痛感するんですけれども、また一方、祭礼から離れることによって芸能はまた芸能として非常に洗練されていくという面もたしかにあるだろうと思います。歌舞伎にしても文楽にしても、それからもちろんお能もそうですけれども、そういう方向をたどってきているし、民俗芸能の歌

舞伎とか人形芝居のたぐいも、あのころはほとんど祭礼と関係がない。ですけど、それなりに洗練はされてきている。だから、両面あるというふうには私は考えています。

茂木 高山先生、最後に感想をいただければありがたいと思います。そして、コメントをいただいてから、会場のご質問にお答えしたいと思います。

高山 きょうのお二方の祭礼に関するご発表を伺っております、やはり祭礼のほうも時代とともに変容するものであるということと同じ意味で、民俗芸能のほうも非常に風流化ということが起こっていくものの中にはあります。それが一方では儀礼性とかそういうところにつながって、そこでまた独自の発展をしていくというものもあるわけですね。また一方では、非常に古いものをとどめているものもあります。私たちはそういった中で祭り、祭礼、それから民俗芸能にふれることによって、普段見えない日本文化といったものに接することによって、神様に対する考え方とかいろいろなことを考えさせられる。調査にいくたびに何か発見がある中でそういうところが大きいと思います。

茂木 ありがとうございます。このテーマで行ってくださったシンポジウムですけれども、最後に高山先生にまとめていただいたような感じになりました。多数の質問がとくに

山路先生に集中しております。これからお答えいただきますけれども、重なっている部分もありますし、必ずしも取り上げられるかどうかわかりませんが、山路先生のお答えのなかでくみとっていただければありがたいです。

山路 御旅所の問題というのは、とりあえずさつきお話ししたので、それについての質問は省かせていただきますが、一つ、レジュメの5、影向の芸能と法楽の芸能について、実例を挙げてもうすこし詳しくご説明くださいというのがあったんです。これはたしかにほくのレジュメの中にそういう項目があったのですが、実は高山さんが「翁」の話をするというので、あえてその話を抜かしてしまっただんです。なぜかというところ、ほくは高山さんの説は全面的に反対なんです。ですから、そのところで完全にだめになると思ってしゃべらなかつたんです。

たとえば高山さんが言ったように翁猿楽が正月だけに納めたというのはごく最近の話であって、ほくが小さい頃の能というのは、だいたい五番立てで必ず「翁」つきであつた。だから一日がかりで、「翁」というのは必ずいちばん最初にやられた。それから、古い時代の記録を見ていただいたら、「翁」が最初にあつて、それから能がある。これが基本ですから、「翁」というのもう一般的に普通に演じられていたんです。この「翁」というのは一体何か

ということを、影向と法楽にひっかけてお話ししたいと思えます。

先ほど高山さんが映像を見せてくれたように、能楽の舞台というのはコンクリートのビルの中にあつても屋根がついています。それから、橋掛りというのは、昔の能の舞台ですと、仮につくるものなので、たとえば祭礼の場合ですと、社務所と、舞台というのは、基本的に拝殿です。関西地方の拝殿だと思つてくださればいいと思います。それをつなぐのが橋掛りというものなんです。その橋掛りの横に、一の松、二の松、三の松がいまでも置かれています。ビルの中に入つても。それから、舞台の周りに白洲という砂利が必ずあります。いまの舞台は、いちばん後ろが鏡板といつて、松がかかれたものになっていますけれども、本来は神社の拝殿ですから、あそこは板じゃないんです。何があつたかというところ、あの拝殿の奥には本殿がある。ですから、関西地方の宮座行事などの祭礼においては、本殿があつて、その前に四本柱の拝殿があつて、その拝殿で翁舞が演じられるのが基本なんです。

翁舞とはいふのは一体何かというと、神様に奉納する芸能ではありません。神様にお尻を向けて舞う芸能です。なぜそうなるかというところ、あれは神が影向して村人たちを祝福する芸能だと思ふんです。これはどういふことなのかと

いうと、猿楽者という専門の芸能者が中世にいて、その芸能者たちが関西を中心とした地方の村の祭礼で「翁」を舞う権利を村人と一部契約をする。それを楽頭職（がくとうしき）といいます。その契約をしたあとに、その猿楽者は必ずその村の祭礼にやってくる。猿楽者としてやってくるんです。

面というのは翁面と三番叟と父尉（ちちのじょう）と三つの面があるのですが、普段はこれは猿楽者が神社の本殿にいちおう祀ってもらっている。中世期、神主といっても村神主、宮座の神主ですから、本職の神主じゃない場合が多いんですが、それにわざわざ本殿からそれまで祀っていた面箱に入っていたご三面を出してきてもらう。舞台の上に猿楽者がまず橋掛りを渡って出てくる。この時には出てくるのは太夫、要するに猿楽者そのものであって、それは神ではありません。あくまでも芸能者です。ですから、ほかのものとは違って面をつけない素面のまま、演者として舞台上に登場します。舞台上に登場したあと、村神主が本殿から面を持ってきて、その面を観客の見える前でつけるんです。それによって、自分たちが祭っている神、だいたい先祖神と考えていいんですけども、その先祖神に演者が変身する。その意味では高山さんが言った面が神であることは確かなんです。つけることによって神に変身して、人々

を祝福する。ですから、これは本殿にお尻を向けて演じる芸能なんです。要するに影向の芸能です。三番叟もそうなんですけれどもね。

それに対して法楽の芸能というのは何かというと、神様に奉納する芸能です。ですから、神様のほうに向かって演じる。それが法楽の芸能です。基本的には翁舞みたいに影向の芸能と法楽の芸能があるという話を、実はこの五番目のところでしたかったわけです。翁舞についてはいろいろ言いたいんですけども、時間がないので、そのことだけをお話しておきます。

高山 いま反対だと言われたので。反論ではないんですけども、正月しか翁舞をやらないというのはいまのことであって。いまほとんど五番立てという形式でやらないものからです。江戸時代は五番立てというのはたくさんあった。それから、「翁」は奉納の芸能であるとは私は申し上げてなくて、「翁」の中に祭祀構造があるというところをきょうお話しさせていただきました。「翁」は舞台芸能であるというところは申し上げましたので、かつての古い話もふれられればよかったですけども、時間がなかったので話が足りなかったんですが。

茂木 時間の制限がありましたので、話し足りなかった。本来的にはもうすこし説明したかったというところですね。

高山 はい。きょうは祭りと芸能の関係というところを取り上げさせていただいたということでございます。

茂木 はい。そういうことをお察しのうえ、決して間違ったことを言っているわけではなくて、本来的にはもうすこし論を進めたいというところでございますので。

岸川さんに来ているのは、祭礼文化のどのようなところに外国人は関心をもっているのか、日本人と違ったユニークな点があるのかどうか。もう一つ、神田祭の山車がすたれた最大の理由は何か。この二つについて。

岸川 山車のほうを先に。福原先生もおっしゃったとおり交通が変わったことと、あとは江戸幕府から明治政府に変わったことによって山車がすたれていったんだと思います。経済的な不況というのもあったと思いますが、江戸時代は江戸幕府の公式年中行事だったので、山車は絶対出さないといけなかったんです。火事がけっこう多かったので、各町で保管された人形が燃えてしまっても、各氏子町は山車を出さなくてはならなかったのです。でも、明治になるとそうした縛りみたいなものはなくなるんです。明治以降は、各町の経済的な豊かさなどが影響したと思います。明治の四十年代まで数は減りましたが山車は出ています。でも、数はまちまちなんです。江戸時代よりも多く出る年もありましたし、どちらかというと少ない年のほうがほとん

どです。明治十七年の神田祭のときには非常に盛り上がったので、四十六本の山車が出ています。そのあと徐々になくなり、茂木先生がおっしゃられたように、江戸幕府の関係がなくなったというのが一つの影響であったと思います。あとは、町の経済的な力の問題だとも思います。

それと外国の方々の祭礼文化への関心なんですけれども、フランスのバリで開催されたジャパンエキスポに参加させていただきました。どちらかというと親日のフランスの方と接する機会が多くアニメのブースが中心のイベントでした。京都市がいらっしやったりしてましたけれども、フランスでは圧倒的にアニメ、漫画の文化が受け入れられておりました。

意外だったのは、フランス人は浮世絵大好きなんだろうなと思って行っただんですけども、浮世絵のことはフランス人はあまり興味がないようです。広重知っていますよね？と日本文化を専攻するフランスの大学院生にたずねてみると、知らないと言われまして、浮世絵はあんまりフランスでは有名ではないことがわかりました。たしかに北斎は有名ですが。それは世界的に有名だと思っただけでも、広重とか歌麿とか知っているかなと思っただけで持っていつて見せましたが、あまりフランスの人はピンとこなかったようです。

茂木 山車がすたれた理由は先ほどのお答えでよろしいですか。

岸川 そうです。電線が張り巡らされて、八メートルの山車というのがなかなか曳けなくなったことと、江戸幕府から明治政府に変わったことによる経済の不況等々、あとは町も変わっていきますし、住んでいる人たちもどんどん変わっていったということです。

茂木 ありがとうございます。長時間にわたり、基調講演に始まりましてシンポジウムまで、本来的には五時に終わるということでしたけれども、どうしても討議の時間があまりにも短すぎたものですから、少々の時間超過を司会権限でやらせていただきました。その点、おわび申し上げます。これでシンポジウムを終わらせていただきます。どうもありがとうございます。